

## 河童の培养

母が炎の海のなかに残つて二十二年、ぼくは詩集『炎え  
る母』を書いて、もう一度、母に向かい合うことをした。

母のことを語るのは、ぼくには易しくないのです。むしろ、辛いのです。でも、何かに対する義務のようなものを感じます。それが何に対するものか、不明です。その不明のよくわからないものの与える苦しみ、それが、はつきり今でもあります。けれども、その苦しみはのりこえなければならない。

本当は、暗い部屋の向こうにいる、懺悔聴聞僧のお坊さんに向かつてつぶやくようにお話する懺悔こそが向いているのです。

これからこのぼくの語る文章は、文学作品などにしたくないです。もうも

ろの文学的な配慮、ひょっとしたら気取り、そういうものからできるだけ遠いところに、ぼくの気持ちはあります。

ぼくの母は、昭和二十年五月二十五日の夜から始まって翌朝まで続いたアメリカ空軍による大空襲の引き起こした、炎の海のなかをぼくと一緒に逃げ惑いました。そして、母はそのまま、炎の海のなかに残り、ぼくはその炎の海を走りぬけてきました。ぼくの母は、そのまま、空そらしくなりました。生き残っているぼくは、炎の海のなかに母を置き去りにしたという思いが強いのです。それから四十年たつて、ぼくはまだ置き去りにしているという思いをぬぐいさることができないでいます。

ぼくの母が炎の海のなかに残つてから二十二年たつて、ぼくは『炎える母』という詩集を書いて、その炎の海の現場に立ち帰りました。その炎えている母に、その詩集でもう一度向かい合うことをしたと思つております。けれども、その作品は、詩の形をとりました。いわば、音楽というものの助けをかりて書かなければ書けませんでした。ぼくの奥からわき起こり、ぼくを引きさく音楽

に身をゆだねなれば、ぼくは炎が母を焼く現場に帰れなかつたのです。

今度は、そういう音楽に頼らないで、できる限り冷静に、母のことを語りたいと思つております。

では、何に頼るのか、それはよくわかりません。なるべく何にも頼らないで向かい合いたい。そのことが母を炎の海のなかから救い出すことにはならないけれども、あらためて母を抱きかかえることになつてほしいと願つているのです。

母の目が、やりきれないような色をしてくる。ぼくは母の乳房を吸うことをやめた。四歳のある日のことでした。

ぼくの母の写真は一枚も残つておりません。

大昔のことですから、今のように人々は写真をたくさん撮らなかつた。それでも、数枚の写真はありました。けれどもそれは、その五月二十五日の夜の二日前の五月二十三日の空襲で、一枚残らず、焼けてしましました。それまでの、

ぼく自身の写真とともに。だから、目で母の生きていた姿を、ぼくはあらためてたどることができません。ただ、まだぼくのなかに母は生き続けておりますので、それと向かい合うことによって、これからのお話を始めたいと思います。

ぼくの母、古賀松枝こがまつえは、おそらく無口でした。何一つ自慢もせず、といつてまた、何一つ卑下もしません。およそ、口をきくことの少なかつた人でした。ですから、母がどういう生活を、ぼくを産むまでの間にしてきたのか、それは、ごく少ない母の言葉の断片からしか、知ることができませんでした。その母の語ったところによると、ぼくを産むまでの生活のあらましは、次のようなことです。

明治十八年、熊本県菊池郡隈府町（現在、菊池市）の農家の安東家あんとうけいの六人兄弟の四人目の子供として母は生まれました。

家は、ひどく貧乏な農家であつて、そのためには、兄弟の真ん中に生まれた母は、小学校に上がる前から、妹一人、弟一人の子守役をさせられていて、小学

校に上がる段になつても、わずか、一ヶ月位しか学校に通うことができませんでした。だから、文字を習つておりません。文章が読めない。いわば文盲です。やがて、娘の頃になりましてから、世話ををする人があつて、長崎市の、当時の言葉で勧工場、今の言葉でいうと、スーパー、またはデパートの売り子になります。その縁で、長崎市のあるお坊さんの奥さんになります。一二、三年たつて、男の子が生まれます。しかし、その男の子が五歳の頃、夫と死別します。一人の息子をかかえて母は、母のすぐの姉が夫と一緒に暮らしをしている、福岡県八幡市（現在、北九州市八幡区）にまいります。

そこで、その姉の夫の仕事の場である、一軒の古物商の主人に引き合わされ、その主人と結婚をします。それが、大正の六年くらいのことです。

その古物商の主人は、古賀丑之助。その夫と結婚して二年目に産んだ子供が、ぼくであります。

産後の肥立ちが悪くて、以後数年間、母は病気がちになります。そのため、ひとりのおばあさんが同居してぼくの世話をみます。

ぼくは、いわばおばあさん子で、幼年期を過ごすことになります。母が長崎市の結婚でもうけた一人息子は母の連れ子になつていまして、それがぼくの兄です。

これが、ぼくを産むまでのたいへん簡単な母の略歴なのですが、それまでにいつたい、どういう男の人との恋愛があつたり、どういうきっかけで長崎市で結婚したのか、数年の結婚生活が、どんなものであつたのか、何一つぼくは話してもらつております。また、ぼくの兄は、いまだに健在なのですが、その兄もあまり知らないのか、あるいはいたくないのか、少しも語つてくれません。

そういう自分の生活を語らないという点でも、母は寡黙、というよりもむしろ、沈黙を守る人でした。

子供たちに語つて聞かせるような楽しい生活、嬉しい思い出などは、おそらくそれまでの母に、なかつたのではないかしら、とぼくは思います。

母は決して暗い人ではないけれども、明るい人ではなかつた。しかしそれは、

当時の農村の貧乏な家に育つた娘の、共通にもつ“宿命”的なものではなかつたでしょうか。

母は、特別に美貌に恵まれていたわけでもないし、人より抜きんでた才能があつたわけでもないし、ごく当り前の娘であつたと思われます。

ぼくの父、古賀丑之助。この父は、母とまるで違う性格の持ち主でした。母とは、丁度二十年、歳が離れておりまして、結婚したのが、五十四歳くらいのときです。生まれは、慶應元年、場所は、福岡県柳河町（現在柳川市）の沖端の、矢部川という川のほとり。これも小さな農家の一人息子です。

十三歳、明治十年の西南戦争が起ります。ぼくの父は、その西南戦争に出ます。ぼくの家には、『長船』という鉄の入った日本刀があつて、その鞘の先端だけが、切つてありました。

「どうしたの？」と聞くと、父は誇らしげに語つてくれました。

「この刃を着物の下にぶち込むと、きっと先のところの鞘の先端が外に出て見えてしまうので、その部分だけ切つたというわけだね」

幼いぼくは尋ねます。

「官軍と、賊軍のどっちについたの？」

すると、父親が笑つて答えます。

「いや、官軍でも賊軍でもなくて、官軍にも、賊軍にも、食べ物や、飲み物を売る仕事だよ」

「儲かつたの？」

「いやあ、両方の兵隊が買つてくれて、ずいぶんお金が入つたさ。わははは」  
父は、元気で陽気なのです。父は、その生まれた農家のあたりの草相撲では、いつも大闘合だったということです。また、何事にも、よく頭が機敏にめぐり、それから帆ハセを作ることの名人でもあつたようです。快活で陽性な少年時代を送つたと思われます。

やがて、味噌と醤油の製造を始め、それが儲かつた勢いで、長崎県西彼杵郡カシキノシマと島という海軍の船が近くに止まる島に出かけて、食べ物、飲み物の商売に励み、やがては、その海軍に物を納める御用商人となります。しかしながら、そ

の後、どういう事情か、高島炭坑その他に事務員として勤めたり、あれこれ職を転々といたします。子供のぼくから見ても、どうも落ち着かない生涯の大半を過ごしたあとに、福岡県戸畠市（現在・福岡県北九州市戸畠区）の隣の八幡市（現在・八幡区）との境の峠、俗称牧山峠で、父は大正の初めに古物商、正確にいふと、古銅鉄仲買問屋を始めました。

その仲買問屋というのは、簡単にいふと、くず屋さんの中仕切りです。くず屋さんが集めてきたものを整理して、鉄は鉄問屋に、ビール瓶やサイダー瓶は瓶の問屋に、それぞれもつてゆく、そういう仲買問屋です。くず屋のいくぶん大きなものだと思ってもらうとよろしいのです。その古物商に運んでくるくず屋さんの一人に仲人してもらつて、そのくず屋さんの妻の妹、つまり、ぼくの母と、ずいぶん歳をとつてから父は結婚したのです。

ぼくの父は、母と違つて、文字を読むことが好きでした。活字本はほとんどもつていませんでしたが、新聞などは隅から隅まで声に出して読んでおりました。そして、和とじの本をずいぶん貸本屋で借りては読みあけつておりました。

また、筆で書く字が、なかなかたぐみでした。そこで、ぼくは尋ねたことがあります。

「学校はどこを出たの？」

すると、父は答えます。

「そんなもの出るものか。村の寺子屋だよ」

父はときおり、機嫌のいいときは、「去年の秋のわざらいに」とか、「女房喜べ、せがれはお役に立つたぞい」とか、淨瑠璃の「くさりを口ずさんでもおりました。道楽者であつたのかもしません。この父は、まだ、大きいことが何でも好きでして、幼いぼくに、よく次のようなことを語つてくれています。

「自分の家の先祖は、柳河藩の勇将、十時十郎左衛門という。十時十郎左衛門は並ぶ者はない、勇ましく強い侍であつて、蛇の女神に惚れられて、結婚する。その子孫がわが家ということになる。いいか、だから、お前には豪傑と蛇の血が入つておる。人並はずれて立派な人間になるにきまつていてるぞ、なあ、お前

は」

まあ、あまり自慢にするほどのこともない父の生涯だったのでしょうか。若いときに抱いていた夢がかなえられないでいるのは確かです。そこに、ごく晩年になつて、ぼくが生まれたのですから、次のようなことをいつては、自分がもはや失つてしまつた夢を、さかんにぼくに泣き込んでおりました。

「なあ、大きなものにならなくてはだめだよ。太閤秀吉になれ。総理大臣になれ。天下をどれ。それが男のやる仕事なんだよ」

そういう夢を四六時中、あびせかけられておりましたので、小学校の四年になるまで、本気になつて、ぼくは自分が総理大臣になることをもくろんでおりました。おそらく父は、遅れすぎた明治維新の風雲児と、自分を思つていたのではないでしょうか。

ぼくの父は、物事を大きく受けとり直すのが好みでした。一つの事実をひどくふくらませるんです。たとえば、ぼくは母親の胎内に十三か月いたと、父はいふんです。

「それは、お前が人並はずれた男になる証拠なのさ。大昔、中国の仙人には、母親の胎内から、腰が曲がつて、八十歳になつて杖をついて出てきた偉いのがいたんだぞ。なあ、大物になるんだよ」

ぼくは大正八年五月一日の生まれなので、その朝、牧山峠の麓の町に行つていた父が、家から千五百メートルばかり離れた峠の登り口にさしかかつたときに、峠の上から「オギヤー、オギヤー」と、すさまじく大きな赤ん坊の声がする。

「これはてつきりお前の誕生の産声なんだと思って、汗ふきふき駆け上つてきたんだよ。いやあ、凄い子供だなあ、英雄だよこれは、と信じたねえ」

母に聞きましたも、ぼくは人並みはずれて胎内にいる時間が長かつたらしいのです。もう臨月のある夜、母が、お手洗に立ちます。用をすませて、すぐそばにある手水鉢に手をさし延べて、そこにある水で手を洗おうとして、ふと、その前の植込みを見ます。闇夜だったのですが、その植込みの木と木の間に何やら物の姿がある。不思議だなと思つてそちらへ顔をつき出しますと、その物

の姿もまた、こちらに顔をつき出すようにする。何だろうと思つてさらに母が顔をつき出しますと、向こうの物の姿もやはりまたこちらへ顔をつき出すようになります。なんと、そこには目がついていて、光っているではありませんか。びっくり仰天した母が、その場に声を上げてへなへなとなる。泥棒だったのです。そのために、臨月が過ぎても生まれずに、十二か月ばかりして、やつとぼくは生まれたのです。

つまり、ぼくは胎内から生まれるときに、母に苦しみを与えて陽の目を見たわけです。そして、その苦しみを与える一つの原因是、胎内にいたぼくが母の目を通して、見知らぬ人間の異様な目からのぞかれたためなのです。無気味です。

産後の肥立ちがよくなくて、ぼくが小学校に入る頃までの数年間、母は病気がちでした。いつも、一ヶ月に半月くらいの間は、床を離れなかつたようです。ぼくはぼくで、どういう生まれつきなのか、身体がひどく病弱でした。脊椎に欠陥があつたとのことで、普通の赤ん坊が誰でもする「はいはい、這うこと

ができませんでした。いざつていきました。そして、一年半くらいいざつたすえに、やつと立ち上がりました。

ぼくはいざるのをやめたあと、よく、疫病<sup>えきび</sup>や赤痢にかかり、またしばしばひきつけを起こしました。もうだめだ、と思われたことも何度もあつたようです。わなわなと震えがやつてきて、それがいつか熱くなつて、そのまま暗くなる。その暗くなる瞬間の苦しい快さを、まだ覚えております。

ぼくの父は、このひどく病弱な子供のぼくを、目のなかに入れても痛くないという可愛いがり方で、甘やかし放題に甘やかしてくれました。おもちゃの飛行機であろうと、機関車であろうと、その他何でも、ぼくの好きなものは全部、買い与えておりました。

そのためでしょか、ぼくの性格は、あとから考えると嫌なものになりました。手のつけられないような、我儘<sup>わがままで</sup>で自分勝手な子供となつてきました。たとえば、近所の駄菓子屋さんだかしやに小さな砂糖菓子がある。それを買って割ると、そこのなかに、一等賞から六等賞までの、印刷された小さな紙が入つていて。買つ

てその小さな砂糖菓子を割らないと、そういう何等賞、という紙きれは出でこない。ぼくはそれを買う。買って一等を期待する。あける、すると六等賞だつたり、あるいは賞の外だつたりする。口惜しくて、残念で仕方がない。またお小遣いをもらつて買いに行く。小さな砂糖菓子を割る。すると五等賞、よくて四等賞位しか当たらない。そういう何日かが過ぎて、もうたまらなくなつて、父にねだつて、小さな賞のお札の入つている砂糖菓子全部を貰える金をもつて行って買ひ占めてしまう。全部をあける。すると、おかしなことに、二等賞も一等賞もそのなかに入つていなかつたのです。そういう馬鹿なことをする子供になつていました。

母のおっぱいも、普通の赤ん坊は満一年くらいで飲むのをやめる。あるいはやめさせられるはずなのですが、ぼくは、二歳になつても、三歳になつても吸い続ける。そして四歳になつたある日、母のもうあまり豊かでもなくなつて、少ししおれた乳房に口をやつております。ふつと母の目を見る。母の目が、悲しいような、やりきれないような色をしている。それを見て、ぼくも何とな

く感じるものがある。そして、ふつともういや、と思う。それで無言のうちに、母とぼくとの間の了解がてきて、ぼくは吸うことをやめました。そのときの母の目の色を、後々まで、忘れておりません。

母が父の目をぬすんだ、そして何かをしたというのは、これ一つしかない。あとは全部父の気持ちに従つて……。

父のぼくへの溺愛でまかね、そしてほとんどぼくに仕えるために呼びよせられたような、おばあちゃん、この一家のなかで、ぼくはさながら若殿様です。しかし、母には、ぼくの兄、七つ年上の連れ子の兄がおります。ぼくが生まれるまでは、父は実の子以上にその兄を可愛がっていたらしいのですが、ぼくが生まれてからは、ひたすらぼくだけが可愛くなつてしまふ。邪険じやけんには兄は扱われないでしょうが、しかし、ずいぶん面白くないことは確かです。

夫と自分の連れ子とぼくの、そういう人間関係のなかで、母は、たえず苦労をしていたに違ひありません。ともすれば、ひがみそうになるぼくの兄、それ

を、一方では、慰めながら、一方では叱りつけたりしなければならない。ぼくは一つの出来事しか、それについては知りません。

ぼくが小学校に入る前の年のある夕方、ぼくが何気なく足を踏み入れたぼくの家の一部屋で、母が、長い箒ほうきを逆手に取つて、当時小学校の上級生だった兄のおしりや背中をさかんに、なぐりつけているのです。涙をぽたぽたたらしながら、そして、口では一言もいわないで。

兄に対するのはこうですが、父に対するは、母は何一つ自己主張のようなものはないなかつた、と思います。

これは、大人になつて聞いて知つたことなのですが、ぼくの母と父の仲人をした母の姉は、やがて年下の若い男と恋愛れんあいしまして、驅落くらくちをします。ぼくの父は、そのことを許しません。昔氣質かつしつの人だったともいえます。母の姉と義絶状態になります。

ところが、ぼくのまだ五歳くらいの頃ごろなのですが、ある日、母がきびしい顔をしてぼくの手を引いて、ぼくの家の裏門から連れ出します。どこに行くのか

と思つてゐると、道を一つ二つ曲がつたある家に案内します。座敷に上がりま

す。するとそこには、一人の婦人が待つていて、ぼくを抱きかかえて泣きます。

それが、父から出入りを禁止されていたぼくの伯母が何かの用事で秘かに母に、  
およびぼくに、会いに来た、その姿だったのです。

ぼくの記憶のなかでは、母がぼくの父の目をぬすんだ、そして何かをしたと  
いうのは、これ一つしかないのです。あとは全部父の気持ちを尊重しながら、  
気持ちに従いながら、暮らしていただと思います。

しかし、これはやはり母の自己主張ともいうべきもののわずかな表れ、と思  
われるものが、一つあります。

ぼくの幼い頃、母は病弱でした。たとえば、とうふの味噌汁などを一口食べ  
て、すぐ吐いてしまつたりしていました。胃も悪かつたのでしょうが、胃以外  
のものもどこかこわれていたかもしないのです。そういうこととどう関係が  
あるのか、母はひとしきり念仏にこつていてことがあります。

普通の念仏ではなくて、隣近所の方々に月に一回、ぼくの家に集まつていた

だいて、大きな赤ん坊のこぶしほどもある玉を幾つもいくつも連ねた大きな数  
珠を、座敷一杯にする人が手にしてたぐりながら、みなさんでお経をとなえ  
る行事をするのです。

とくに母が、大きな声を張り上げるのです。これはぼくの聞いた母の、

『歌』の唯一のものです。しかもそのお経は、ひどく調子つづれなんです。

異様に母の声だけが高かつたり、低かつたりして、聞いている子供のぼくが不  
思議な思いをしました。どういう心の問題をもつた上での信心なのか、行な  
か、ぼくにはいまだによくわかりません。

家中の者から甘やかされてしまつたぼくは、当然のことながら、内弁慶です。

たいへんな人見知りをする子供です。

やはりこれも小学校に入る前、珍しく母に連れられて、小さな旅行をしたこ  
とがあります。行先は父の姪のいる佐賀の家です。この家で一緒に部屋に母と  
ぼくとがいるときに、母がふいにいなくなります。ものの二分か、三分なので  
しょうが、そのときぼくは、「おかあさん、どこ行つた? おかあさん おか

あさん」と、泣いて母のあとを追つて探しました。それで、父の姪たちが、いっせいに、「甘つたれ、泣きべそかき」といつてはやし立ててしまいました。ぼくは、父親つ子でもあり、おばあさん子でもあり、そして母親つ子でもありました。情けない子供でした。

やがてぼくが小学校二年になるときに、道路拡張のためにぼくの家が取りこわしになつて、同じ戸畠市の日ぬき通りの横丁の通り町に越して行くことになります。時期からいうと、それは昭和の始まり、昭和の二年のことですが、世のなかに不況の波がおしよせてきます。ぼくの家の古物商の商売も、次第に陰つてまいります。

五十六歳でぼくを生んだ父は、当時もはや六十三歳となつていて、その二年前のまだ牧山峠にいた頃に起こつた脳卒中の予後を養つております。商売人としての活気を失つております。

古物商というのは、くず屋さんのもつて来た、ボロはボロ、ビール瓶やサイダー瓶の瓶類、鉄くずは鉄くずと、仕分けをしなければなりません。仕

分けをするのは、古物商の家の者の仕事です。病後の父は、そういう仕分けの仕事をしなくなります。かわりにその仕事をするのは、十七歳になつたぼくの兄、それから、四十三歳になつたぼくの母、この二人なんです。

母は、朝から晩まで、まず家事をします。今の世のなかのように電化やガス化が進んでいませんので、ごはんひとつ炊くにも、薪なきに火をつけなければならないし、お皿一枚洗うにも、お湯をわかさなくてはいけない。そういう面倒な家事をするかたわら、次には、兄と一緒にビール瓶を並べてはそれを荷造りし、鉄くずを集めてはそれを大きな袋に入れる、という作業をしなければならない。そのためでしょうか、それまで病弱だった母のからだは、手に分厚い血管が浮き出すほどに、たくましさをましてきます。

兄は中学校に入りたかつたのですが、家の事情を考えて、高等小学校を出ると進学を諦め、家業をつぐことにしています。家のなかには労働者が二人いる。そして残りの父は何をするかといふと、いくぶん商売の取りしきりはするものの、家にいて和とじの本を読んだり、散歩に出かけたり、芝居を見にいった

り、好きなことをして遊んでいるのです。そして、口のおこった人ですので、朝から晩まで、刺し身を食べたり果物をつまんだりして、優雅なその日その日を送るのです。

そして、その父の遊びのような日常と駆走のお相手をするのは、ぼくなのです。さんざん労働をする母は、父が鯛たいを食べるときは鰯いわしだけを食べて満足しているのです。兄は、次第にそういう父の我儘が嫌になつて、夜はどこかへ遊びにばかり行くことになります。晩の食膳は、父という殿様と母という召使い、およびぼくという若殿様、それから乳母に当たるおばあちゃん、この四人だけとなることが多かつたのです。

若殿様であるぼく自身も嫌でした。母もむろんたまらないでしようが、一言も文句はいわず、仕事疲れが出るのでしょう、暗い陰を宿した顔を黙つてうつむかせているだけでした。

昭和三年、今上陛下の即位を祝う御大典が行なわれました。十一月の初旬のことです。その御大典のさなかに、ひつそりとぼくのおばあちゃんが亡くなりかが暗くなる思いを味わいます。

父と母がいる。しかし、本当に父と母なのだろうか。ひょつとして、河童が父と母になつてゐるのではなかろうか。  
ます。亡くなつて初めてぼくは、そのおばあちゃんがじつは、ぼくの父の母でもなければ、母の母でもなくて、血のつながりのない他人であつたということを知つて、ひどくショックを受けます。大人を信じられなくなります。世のながが暗くなる思いを味わいます。

昭和四年になると、世のなかの不況は、ますます激しくなります。東大の卒業生の就職率が、約三〇ペーセントといわれています。深刻な就職難です。農村の貧窮がきびしくなり、その娘さんたちは数多く身売りをされて、都會地の私娼窟しじょう窟で働くなければならなくなります。ぼくの家も、通りの家の二階を船員さんたちに貸す海員宿として、やつと家計の安定を計ることになります。

そういう昭和四年の夏のこと、戸畠の港の埋め立て地で開かれた衛生思想の普及のための映画を見に行き、ぼくはそこで、あわせて上映された、河童を主

人公とした映画に魅入られて、激しい衝撃を受けることになります。

ある小さな田舎町、そこに両親と、男の子と、その妹の四人が平和な暮らしを立てております。その家のそばには川が流れています。カメラはその川底に入つてゆきます。するとそこには、おどろおどろしい河童の少年が映ります。月夜です。明るい光に導かれるようにして、河童の少年は土手に上がります。夜がふけてきます。河童の少年はひたひたと歩いて、親子四人のそのつつましやかな家の窓からなかをのぞきます。いかにもしあわせそうです。その光景に見入ります。

翌日になります。夕方の闇が、その小さな町をおおいます。その家の少年は、「遊びに行つてくるよ」といつて外に出ます。少年の着ている紺飛白の、紺と白のまだらが、夕闇のなかにちらちらと浮き沈みします。それは、やがて川べりに近づきます。カメラは少年の足を映します。すると、ふいに水のなかから奇怪な手が出てくる。その手は少年の足をつかむ。カメラ、パンします。

夕闇は先ほどよりもっと濃くなつております。そのなかを、川のほとりから

紺飛白が縫つていきます。それは、先ほどのしあわせそうな家へ入つてゆきます。

両親は、「やあ、お帰り。遅かったね」と少年を迎えます。しかし、四歳か五歳かの妹は目を丸くして少年を見つめます。その目は大きく丸くなります。と同時に少女は、叫び声をあげて卒倒します。

それを見た夜、小学校四年生のぼくは、熱に浮かされます。翌日、鉛のようなものを自分が飲み込んでいるのに気がつきます。自分の家には、父と母がいる。しかし、この父は本当に父なのだろうか、ひょつとして、人間ではなくて河童が父になっているのではないかろうか。目の前に母がいる。しかし、この母は本当に母なんだろうか、ひょつとして、河童が母になっているのではないかろうか。そう考えてしまします。そういう考え方からのがれることができなくなります。沈み込みます。

大人になつてからの言葉でいうと、自同律をぼくは疑つた、ということになります。そして、ぼくの世界のなかから自同律が消えた、ということになります。

す。自同律を支えるものは、何か。それは、習慣とか、思い込みとか、言い伝えだとか、そういうものであるにすぎない。どうしてこの父は人間であつて河童でないか、それを決定する理屈など本当はありはしないのではないか。

小学校四年のぼくは考え込んでしまいます。そこから離れることができなくなってしまいます。そのとき、ぼくにその河童の事件が与えたのは、世のなかの人間という存在の、そして同時に存在一般の、基本を考えさせることでした。しかし、結果としてぼくに与えられたのは、そういう哲学問題ではなくて、むしろ、人間にに対する一種の冷やかさなのでした。それ以後、ぼくは妙に父や母に、うとうとしたい感じ、親しめない感じをもつことになりました。河童の事件は、ぼくの考えることを支配するよりは、ぼくの感じることを支配することになりました。

やがて昭和五年となり、昭和六年となります。不況は、ますます激しくなってゆきます。そういう昭和六年の五月二十五日の夜から眠り込んだまま、父は二十六日の朝未明、眠りから覚めることができなくなります。脳溢血の死を迎

えるのです。だが、その死の床のそばにすわりながら、ぼくはなぜか少しも泣けてこないのです。生きているものなら死ぬのが当然ではなかろうか。死ぬに早い、遅いがあるにすぎないのでなかろうか。そういう当然のことになんで涙したりしなければならないのか。ぼくはそういう奇妙な理性のとりこになっていたのです。

われながら嫌な、可愛い気のない子供です。しかしそのときのぼくは、自身のいわば哲学に準じていてことに高ぶりのようなものを覚えておりました。

当時のぼくは、頭のなかだけは、かなり大人びておりました。それは、一つには、すぐ近所に小さな劇場ができて、そこで行なわれる芝居の興行に、ぼくの父がほとんど毎日のように連れてってくれたことによります。そこは、昼と夜の二交代で日がわりの演しものをやっているのです。そのレパートリーは、主に淨瑠璃を浪花節に変えた、いわゆる節劇といふもので、歌舞伎のあらゆる上演題目、それに新派、さらにつけ加えて、股旅物、あるいはチャンバラ映画の舞台化されたものなど、じつに広汎なのです。その劇場で、満二年近くで、

ぼくは一千本ばかりの芝居を観た勘定になります。それらの芝居を通して、ぼくは、人情、世態をはじめ人間のドラマのパターンのほとんどを覚えたということになります。

ぼくの頭のなかがかなり大人びていた理由のその二つ目は、『少年俱楽部』『少女俱楽部』はもとより、『婦人俱楽部』『講談俱楽部』『キング』などなどの大衆雑誌、それに、よくわかりもしない『改造』『中央公論』などの総合雑誌を読んでいたことによります。なぜそういうものが手に入つたかといふと、ぼくの家は古物商ですので、当然、各家庭から払い下げられた古雑誌が集まつてくるわけです。それが、いつもぼくの家の片隅に積み上げられている。そのなかから、手当たり次第にぼくは読みあさつたのです。そういう古雑誌のなかで、ぼくは人生の、極端にいうとあらゆる思想のパターンを覚えました。

こういう頭のなかだけは大人びていたぼくは、父の死に目にあつて、これから先、生きる上でどういう希望をもつていていたのか。

果たせなかつた自分の夢を、太閤秀吉になれ、天下をとれ、という形で、父

はぼくのなかにたくします。母は、それに対してもいいません。不賛成ではなかつたに違ひない。けれども、そんなに賛成でもなかつたのではないでしょうか。そう無理をすることはない、という気持ちが強かつたのではないでしょうか。むしろ、少しでも、早く世のなかに出て、自分で自分の生活を立てたほうがいい、と思つていたと、今になつてぼくは考えます。それというのも、母の生まれ育つた家庭は、たいへん貧乏な農家であり、母の兄弟姉妹はみな小学校しか出てなくて、それぞれ大阪で職工をやつたり、あるいは小さな商人の奥さんになつたりしている、いわば、一口に庶民であり、庶民以外の何者でもありませんでしたから。おそらく、母もそういう庶民の考え方を抱いていたんだろうと思います。父は、その庶民であるに違ひないのでですが、庶民でありたくなかつた生涯を送つたはずれ者であつたといえます。

母の長兄に、寅八といふ、ぼくにとつての伯父がいました。この人は、小さいときから生まれ在所を飛び出して、九州や韓国の各地を、おそらく、自由労働者として放浪し、徵兵検査にも帰つてこないまま、徵兵忌避をつらぬいた、

といえば聞こえはいいのですが、要するに、あちらこちらを流れ歩いていたわけです。やがて、そこひになつて、昭和六年、その娘ひとりを連れて、ぼくの家や、ぼくの母の妹のところなどに寄宿して、居候生活をしておりました。

けれども、ますます世のなはは不景気になつてゆく。どの家庭の家計も苦しくなる。そこで、東北の農村の娘に起ることが、その寅八おじさんの娘、小学校六年のぼくより一つだけ年下の娘の身の上に起りました。

ぼくの父が亡くなつてしまもなく、その娘は、福岡県の片田舎の芸者の下地つ子に売られることになつたのです。やがて、芸者になつたら、どういう仕事をしなければならないか、それを頭だけ大人びていたぼくは、知つておりました。だから、強く反対しました。しかし、母は下を向いたまま、九州弁で、「しかたがなかけん」と、一言いつて、そのあとはぼくにかまいませんでした。きびしい横顔を向けたままで。

その横顔を見て、ぼくは考え込みました。ぼくは、中学に進級したかつたのです。父から吹き込まれていた“天下をとれ”という夢が、まだぼくのなかに

かなり強く残つていたし、るしだと思います。

子供心にも、ぼくが天下をとれるかどうか、そういうことはわからない、ということだけはわかつておりました。だが、そういう天下をとるとらないは別として、こういう貧乏な世界から抜け出すためには中学に行くことがどうしても必要である、とぼくは知つておりました。“大学は出たけれど”という極めて難しい就職難を一方では心得ていたものの、やはり子供です。自分だけは就職できるだろう、と思つていたに違いないのです。

しかし、いとこが芸者の下地つ子に売られることになつて、ぼくは考え込んでしまいました。ぼくもまた、来年の小学校卒業を待つてすぐに、小僧さんでも、職工さんにでもなるべきではなかろうか。ふさぎ込んでしまいました。だが、子供の考え方なんて、浅はかなものです。やはり、自分が可愛いかったに違いありません。黙つて、もう黙つて、自分のいとこが、世話をする人に手を引かれて去つてゆくのを、見送るだけでありました。

けれど、そのときに与えられた傷はやはり疼いて、そして、悪いウミをもつ

てぼくのなかで広がつていったのだらうと思つております。

父がどれだけの働きを、古物商としてしていたのかは、はつきりしません。

しかし、父が亡くなつてから、ぼくの家の商売がたいへんやりにくくなつたことは目に見えていました。残された母は、なにしろ女手ですし、兄は、徵兵検査を受ける二十歳の年齢であるにすぎません。当然、商売は父のいたときの規模からますます小さくなつてゆき、このままでは、どうにもならない、というので、一家離散と決まりました。

別府湾の夕焼けの光が母の目に飛び込む。それが母の泣くのを見た最初だ。母の多くの不安のなかにはぼくがある。

昭和六年十二月二十五日、クリスマスの日の朝に、ぼくは母と一人で、母の姉、ぼくが幼い頃にこつそりと父の目をしのんでぼくに会いに来ててくれた伯母、その伯母のいる宮崎へ行く日豊線の列車に乗り込みました。

列車にゆられていても、これからどうなるのか、ぼくはよく知らないような

状態でした。ほんやりしていました。小倉を出た列車は、やがて数時間の後に別府湾にさしかかります。ふと、窓ぎわにすわつているぼくの前の母の顔を見ました。すると、母の目のなかは、真つ赤になつてゐるのです。おや、と思いました。おりしも、別府湾の海が夕焼けなんです。その夕焼けの光が母の目のなかに飛び込んでいる。キラキラ赤い反射をしている。そして、母の目は涙でいっぱいなのです。ぼくは、その母の目のなかをのぞき込みました。母はぼくにのぞきこまれてもなお、涙をあふれさせ続けています。

ぼくは黙つたまま、何かを感じとりました。何か……。その一つは、母が宮崎に行くことを明らかに悲しんでいるということなのです。もう一つは、母のなかには、多くの不安がある、その不安のなかにはぼくがある、ということなのです。その二つを感じとりました。しかし、ぼくは口をきくことができませんでした。いつたい何をどういえば母の心が少しでも安まるのか、そのことを當時のぼくは知りませんでした。

今のぼくなれば、いつたかもしません。「ぼくがしつかり働くから、心配

しないで」と。そういう言葉を、ぼくは別府湾の夕焼けのなかにいる母に向かっていうことはできませんでした。考えてみれば、そのときだけではなくて、母が亡くなるまで、あるいは母が亡くなつてからも、ぼくは母を慰めることのできる言葉を何一つはくことができなかつた男です。

なぜ、そうなのか。おそらくぼくのなかに、ある恥ずかしさを感じる心が強かつたということがあると思います。それともう一つ、言葉にすれば、何かがよこれてしまふ、という思いがぼくにあつたからでしょう。だが、今から振り返れば、そういうことは余計でした。もつと率直に、ぼくの覚悟のようなものを母におつけるべきでした。

宮崎に着いてから、しばらく母と一緒に伯母の家の片隅を与えられて、ぼくは暮らしました。母は、伯母の仕事、それは破れ饅頭、東京でいうギュウヒのようなまんじゅうを作つては駄菓子屋さんにおろしをする、さらに落花生などを煎つて、それを分けて駄菓子屋さんにおろす、一口にそういうおろしを兼ねた駄菓子屋さんをやつしていました。

やがて、ぼくは転校した宮崎第二小学校を卒業することになります。その頃、母は、宮崎の生活では充分な生活費は無論のこと、ぼくを育てるための費用も出せないことを承知したらしくて、戸畠に帰つてゆきます。ぼくひとりが、伯母のもとに養われることになります。ぼくは、土地の商業学校に行け、という伯母や伯父の意見にさからつて、宮崎中学に入学します。

そのときのぼくの気持ちのなかには、簿記やそろばんを覚えて、商業学校を出てすぐ会社や工場に就職することは嫌だ、という気持ちが強かつたのです。そうではなくて、中学を経て、さらにその上の学校へ行く、たとえば「大学は出たけれど」の嘆きがぼくを待つにしてもかまわない。そういう気負つた思いをもつていました。

昭和四年頃の『少年俱楽部』に、佐藤紅緑の「あゝ玉杯に花うけて」という小説が連載されていて、ぼくはその愛読者の一人でした。その小説の主人公は、早く父親を亡くして母一人子一人の貧乏な生活のなかから、新聞配達や牛乳配達や豆腐を売りながら苦学をする。そうして、「知慧と眞理と友情の泉」

であるという第一高等学校、「あゝ玉杯に花うけて」の寮歌をもつ第一高等学校に入ろうと志を立てる。

ぼくも、富崎の伯母の家で母や兄と離れて、生活費を伯母にみてもらい、月謝を戸畠に残っている兄から送つてもらうという生活のなかで、もつともつと貧乏になれば自分で新聞配達や豆腐売りなどをしながら苦学して中学の上の学校に進みたい、と思っていました。そして、できれば、この世の中から子供を、娘を身売りしなければ救えないような貧乏をなくす仕事の一つをしたい、みんなが泣かないですむよう世の中になるように努力をしたい、という願いをもつておりました。しかし、そういう貧乏やみんなの悲しみがなくなるようになるためには、自分が、そして世の中が、どうならなければならないかということについては、いつも何も知らないのでした。ただ、望んで入った富崎中学校の勉強が楽しくて、学校が嬉しくて、毎日勇んで通つておりました。

ただ、ぼくには居候としての義務のようなものが、おのずから生まれてきました。伯母の家には、仕事を手伝う二十歳はたちになる若い衆が住み込んでいました。

ぼくはいわば弟分の若い衆として、朝は伯母の手伝いをしてご飯を作り、夕方は学校から四時頃帰ってきて落花生を煎る。落花生を煎りながらゴロゴロと大きな音をたてて大きな釜がゆれる。そのそばでなら声に出しても聞こえないので、英語のリーダーを何度も読む。それをすますと、饅頭の配達に行つたり、あとかたづけをしたり、それを若い衆と一緒にやつて、夜は十二時近くになってやつと解放されて、若い衆と枕を並べて寝る。そういう生活をしないわけにはいきませんでした。そして、そういう生活がぼくには少しも苦しくはなかったのです。日曜日になると、中学の勉強以外の好きな本を読むことができる暇はあつたのですから。学校の成績も悪くはなかつたし、伯母の家のうけも悪くはありませんでした。つまり、広い意味での優等生の生活をぼくは一年間、富崎で送りました。

我儘は何一つ許されない。そのかわり、それまでの自堕落じだりやく、好き嫌い、気弱さというものが、いやおうなしに、その富崎での一年間のなかで、なくなつていきました。病弱でもなくなりました。富崎時代はぼくの一つの転換期であ

つたということができます。よく学業にも励み、伯母の家でもよく仕事の手伝いをする、そういうぼくのいわば優等生ぶりが、母に“強い子”的概念を形づくらせることになったようです。つまり、あの子は黙っていても学校でも家庭でも自分の為すべきことをちゃんとしていく人間なのだ、という固定観念を母に植えつけたようです。

昭和六年九月十八日に満州事変が始まっています。これから日本は十五年戦争の泥沼に入つていくわけですが、しかし、この昭和六年の満州事変で軍需産業が起こつたために、世のなかは次第に景気がよくなつてゆきます。とくにぼくの家の古銅鉄仲買問屋の仕事は活気をみせてまいりました。ぼくの中学一年の生活が終わる頃には、母と兄は二人で力を合わせて商売を広げていける状態になつていました。そこでぼくは、昭和八年四月一日からまた戸畠へ帰り、隣町の小倉中学に転校して、そこで新しい中学二年生からの生活を始めることになります。

人生には何の意味もないのだ、という痛覚を、芥川龍之介と高山樗牛が、ぼくのいろいろの奥のほうに植えつけた。

小倉中学は、北九州一円では、ほとんど随一といつていいくらいの上級学校への進学率を誇る進学中学でした。上級学校受験のための勉強をさせることが、唯一の教育の目的であった中学でした。ぼくは、中学二年生、三年生、四年生と、その受験勉強本位の教育にもそう遅れをとらず、すんで勉強していましたし、家庭でも母や兄の仕事を多少は手伝つておりました。表面、まだ優等生の中学生生活を送つていたといえます。

しかし、中学二年の頃に、小学校四年のときの河童体験の次に激しい一つの事件に出会いました。それは、芥川龍之介の『歯車』と、高山樗牛の『嗚呼、人生竟に如何』という二冊の本から与えられた事件です。

一口にいふと、龍之介の作品からは感覚としてのニヒリズムを、樗牛の作品からは理屈としてのニヒリズムを注ぎ込まれたのです。

とくに、櫂牛のニヒリズムの理屈は、ひどくよく中学一年生の心のなかにしみ込んでまいりました。それは、どんな大臣や將軍や学者や英雄もひとたび死んでしまえばもう骨になつてしまふのだ、人はすべて死ぬ、この運命を免れる人は一人もない、このとき、人生とははたして何なのであらうか、空しいものではなかろうか、そういう理屈です。

龍之介の『歯車』は、精神を病んだ近代人が、何にもよりどころを見つけることができず、何かを受けとることがあれば、必ずそこに死、または、錯乱、狂氣の匂いがたち昇つてきて、それに心の内側を侵されないわけにいかないとの報告というふうに、当時のぼくには受けとられました。

この人生にはいつたいどういう意味があるのか、ないのではなかろうかと、ぼくは思いました。そういう人生の意味を、中学二年、三年の、体験もなければ、まともな読書もほとんどしなかつた少年が考えはじめる、どういうことになるのでしょうか。誰に相談することもできない。どういう本を読んだら解答が与えられるかもわからない。自問自答を繰り返すほかにはない。それまで

にぼくの読んだのは雑誌、月刊誌であつて、人生の基本問題について語つてくれる文章などは掲げてはいない。だから、自問自答とは、堂々めぐりの泥沼のなかに落ちていくことの別名であるほかはありませんでした。

その泥沼のなかにいるときによくなきことが起きました。この幼いニヒリズムが、河童体験が与えてくれた自同律への懷疑と一緒になつたのです。そして、自同律以外の、世間がこれだという定言または公理、あるいは原理のような基本的な命題、そういうもの一般への否定の観念を、ぼくはもつようになつたのです。すべてが信じがたい。その信じがたさを「いや、こうだよ」と立証してくれる原理を探しても、見つけることができない。あとから思えば、人生の諸々の事柄の真実性のすべてが、科学その他の学問によつて誰もが納得できるように立証できるわけでもないのです。

天が動くのではなくて地が動くのだと、かりに科学が教えてくれるのだとしても、感覚がそれをそうだと受け取らないときには、ことに少年には、ほとんど何の説得力ももたないことになりがちです。そういう世のなかの、万般につ

いての疑いを、中学の先生方をはじめとして、世のなかの人たちは少しも疑わないで、やすやすと信じ込んでいる。これは愚かではなかろうか。それにまた、人生が無意味でないとすれば、どういう意味があるのかということを、世間の人々は中学の先生をはじめとして誰一人たずねようとしていない。あるいは尋ねようとしたかもしれないが、結論を見つけないでいる。人生にはこういう意味がある、というのと、人生には何の意味もないのだ、というのと、二つのものを秤にかけてみると、人生には意味がないのだ、ということのほうが、どうも真実なのではなかろうか。そんな痛覚を、中学二年の『歯車』体験と、『嗚呼、人生竟に如何』体験は、ぼくのこころの奥のほうに植えつけてくれたのです。

ただそのニヒリズムというものは、初めの間は一つの観念としての作用、支配力しかもつていませんでした。それが、中学二年生、三年生、四年生と上級になるにつれて、だんだんぼくの生活そのものを支配する強さをもつてくるのです。

ぼくは中学四年から第一高等学校を受験しました。不合格でした。しかし、何故、第一高等学校を受験したのか。一つには、『あゝ玉杯に花うけて』の影響があつたと思います。もう一つには、自活のためです。ぼくの家が貧乏であつて、高等学校の学費を出してはもらえない。その高等学校、さらにその上級の大学の費用は全部自分で稼がなくてはいけない。そういう稼ぎは、当時は家庭教師の仕事からしか与えられない。しかも、受験雑誌のすべてを読んでみると、家庭教師で生活ができるのは、東京にある第一高等学校以外にはないのです。

しかし、あとから思い返してみれば、第一高等学校を受験する気持ちの奥には、次のような動機が、ひそかに働いていました。

ぼくは小学校のときに、父から、「総理大臣になれ、太閤秀吉になれ、天下をとれ」という夢を吹き込まれました。その夢 자체を中学三年、四年のぼくが、ぼくの夢として抱いていたわけではありません。政治家などになる願望は少しももつていませんでした。それでも、その夢の内容ではなくて形式は、ぼくの

なかにあつてぼくを動かしていたと思います。

何しろ、ぼくの家は貧乏でありました。兄も母も一日中労働しないと、生きていけない。そういう労働する庶民というものは、たとえば、そこひになつた寅八伯父さんの場合、自分の娘を芸者に売ることもやむをえない事態に追いつめられます。それを庶民と一口にいっておきますと、その庶民のひとりがぼくであるはずです。けれども、ぼくはそういう庶民のままでありたくない。何とか、その庶民の生活の外に出でいくことをしたい。そのためには上級学校に行かなくてはいけない。それが、庶民から脱出する唯一の道です。そして、それは、形からだけいえば、父の勧めていた夢に通じるものです。

けれども、父の与えてくれた夢を追うために上級学校に行こうとしているのではない。だから、一種の矛盾、自家撞着のようなものが、そこにはあるのです。

ぼくは中学四年になつた頃、文学少年兼哲学少年でありました。そのぼくの求める「知慧と<sup>\*</sup>眞理と友情の泉」は一高にしか求められないのではないか、つ

まり、「高だけが『知慧と眞理と友情』を与える絶対ではないか、そういう迷信をぼくは抱いていたのだと思います。その絶対がもしも手に入らなければ、あとは『無』なのだ、空しいのだ、ほかに高等学校も高等商業学校も、高等工業学校もあるだろうけれども、それは、その一高という絶対に比べれば、無に近いんだ、そういう思い込みが、ぼくのなかに働いていました。そして、そういう絶対か無かという方式は、それはぼくだけではなくて、たぶん当時の多くの少年に共通の心情であつたと思います。

そういう高等学校の受験についてだけではなしに、生きることの向こうにも絶対か無かだけを見ている少年と、どんなにぼくの母は違つていたか、その少年からどんなに遠くに母はいたか、今さらながらそのことをぼくは考えます。

ぼくの母は農家の生まれであり、文字の読めない文盲であり、そして、小さなデパートの従業員であつたり、中流とはとうていいえない下流階級の主婦であつたりして、その生活のなかにはヨーロッパというものの影は少しも落ちていませんでした。キリスト教も知らなければ、英語も知らない。自然科学も関

係ないし、まして、ヨーロッパの思想などというものにふれることなどはありませんでした。その生活のしかたを見ても、たとえば、食生活でいえば、煮るか焼くかしか知らないのです。ガスの使い方も心得ていないほどです。パンは食べない。バターも関係ない。宗教は仏教で、それも経文を文字で読むわけではない。お坊さんのお説教や信者の言葉を聞くに過ぎません。

では、何が生活の原理であつたのか。おそらく、それは、日本の古い昔からの庶民、柳田国男さんの言葉を借りると常民のもつてていたものと同じだと思われます。おそらく八百万の神を信じ、仏教やその他の土俗の神様を信じ、一口にいえば、今日様、お天道様を信じている、そして先祖伝來の庶民達のもつてているおのずからなる生活の知恵をもつていたと思います。ぼくが、それまで受けた小学校や中学校の教育は、ほとんどといつていいくらいヨーロッパの学問や思想です。その小学校や中学校の教育とは縁のないところで、母は自分というものを形づくった人です。

その母が、絶対か無かなどというものを追い求めている文学少年兼哲学少年

のぼくと、どんなに遠いところにいたか。そして、母がそんなに遠いところにいるということを、ぼく自身は當時知つていながら、しかし、そのことがいつたいどういう意味をぼくと母にもたらすのか、どういう力をぼくと母の関係の間に介入させるのか、そういうことについては、ぼくはまるで考えることもしませんでした。

## 常民と言語

母は、行動はするけれども、少しも口はきかない。沈黙のままの叱責です。だから、かえつて激しいのです。

庶民、柳田国男さんの命名によれば常民、これはどういうものでしようか。おそらく縄文の昔から日本の各地に住みだして、先祖代々住み続けている人々であり、時代時代の権力から最も遠いところにあって、ときに権力を無視し、ときに権力から押し流されても柳に風と受け流す、そういう土着、山や海のほとりに土着した人々のことです。

海のかなたからやってくる、そして、権力という上のほうからやってくる、さまざまな新しいものの考え方、宗教、思想、政治、文化、そういうものの影

響を静かにはね返しながら、ときにはゆっくりとその影響をのみこみながら、あくまでの自分たちの先祖伝来守つてきた思想、文化、あるいは暮らしの在りかたを固持してきた人たちのことです。

その人たちの特徴の一つは、自分たちが親代々生きてきた風土の木や川や水や風や雲や空などというもののから、生きる基本を教わっている、ということです。

この庶民＝常民の言語は、むしろ文字以前、文字以外のものです。その文字以前で文字以外のものから強く深く感じるもの、それをとり込んで自分たちの生活の中心として、庶民＝常民は生きているのです。これを前近代、近代以前と呼ぶことができます。明治維新以来、西欧各国から導入された思想や文化や自然科学や宗教によって育ち、それをこころの中心としている人々、一口にそれを近代人というならば、前近代である庶民＝常民は、近代人である知識人や時の支配者たちの階層とは相離れているだけでなく、場合によって相対立するものもあるわけです。

こういう庶民のひとりがぼくの母でした。現にぼくの母は、靴はおろか帽子などというものを身につけたことが生涯ありませんでした。いつも着物、それも黒っぽい地味な着物ばかりを着ておりました。昭和十六年、第二次大戦が起つて以来、暑い夏などにはときどき、アツパツパなどと当時称されていた簡単な洋服は着ることになりましたが、ほとんどが和服です。それに、化粧というものを一切したことがない。眉ずみはおろか、口紅などもつけたことがない。たとえそれが、お正月だとか、ぼくの誕生日とかというような、はれの場であつても、そういう派手やかな装いは一度もしたことがない。そのうえ、おそらく語りたい言葉があつたのでしようが、それはほとんど□にすることがない。つまり、□にしようとするその言葉は全部近代の言葉ではなくて、前近代の言葉だったからでしょう。ある種の異和感が、母の身のまわりの生活との間にあつたのではないでしようか。

こういう母の言語に、ぼくはもつともつとつき合うべきでした。ゆっくり丁寧に母の気持ちを開いて、その奥にある言語の響きに耳をかたむけるべきでし

た。しかし、そういうことをするかわりに、中学生のぼくは、見たことも行つたこともない遠い外国の、イギリスやアメリカの言語、あるいは中国の古い、孔子や孟子の文章を学んだり、それから、ヨーロッパの近代を開いてくれた自然科学、および文学や絵画などの方に分け入ることばかりを考えていました。そしてそれによつて、自分の生まれて育つた庶民の階層から抜け出ることだけを考えていたのです。

そういうぼくを、母はどういうふうに思つていたのか。それはよくはわかりません。昭和の十年、ぼくが中学の三年になる頃に、兄は結婚をしておりますが、母はその結婚に対し、一言も賛成とも不賛成ともいつていません。あまり賛成、ではなかつたのではないかと思うのですが、兄に対し、それを口にすることもしない。同じように、ぼくに対しても、こういう仕事に就いたほうがいい、などということをじかにいつたことはない。ただし、あとから聞いたところでは、叔母には「長崎の高等商業学校に行って、三菱造船の社員になるといいのに」と、つぶやいていたことが、あるそうです。おそらく若いときの長

崎体験のなかで、三菱造船の社員の人の生活の安定ぶりをまざまざと見ることがあつたことの表れだらうと思います。それくらいなのです。母親がぼくたち兄弟にもつてゐる希望や期待というものが、形をもつて人前に出されることは、ほとんどなかつたのです。

当時、ぼくの幼い頃の病弱を絶えず医学の立場から救つて下さつたお医者様、そのお医者様がぼくの母のおつき合いの範囲のなかでの唯一のインテリでしたのが、そのお医者様のところにぼくの母は直接には行かないで、ぼくの母の妹に行つてもらつて、「あの子は、第一高等学校などといふところを受験しようとしているけれども、それでいいのかしら、かまわないのかしら」と、相談をもちかけたことがあるようです。そのとき、そのお医者様は、「ああ、好きなよううにやらしておくといひよ、あの子には」と、答えたのことです。

前近代の母から育てられながら、そしておそらく前近代の少しばすれ者である父から夢を注ぎ込まれながら大きくなつていく過程で、ぼくは父を嫌いだつたことはありませんでした。むしろ、面白い親父だと思っておりました。そし

て、ほとんど沈黙を守っているぼくの母も、少しも嫌だなと思つたことはありませんでした。ぼくの願つている人間の生きかた、それは一口にいふと、近代人としての生きかたでしたが、それとまるで無縁、場合によつては正反対の生きかたをしている父と母に対して、異和感は覚えていたはずですが、少しもやりきれなさを覚えることはありませんでした。

これは、何故でしようか。ぼくの抱きはじめてる近代意識が薄弱であつた、ということがひとつあるかもしれません。しかし、それよりも、親子である、ともに生活をする、いわば肉親のもつてゐるおのずからな親和力が働いていたせいなのだろうと思います。もつとも、その中学の頃、ぼくは何故だろうなどと考えたこともありませんでした。中学生のぼくは、小学校以来の芝居小屋での歌舞伎その他の古典のあらゆるレパートリーを観たり、小学生以来の古雑誌の乱読などによつて、人間には通じていたとは思つておりますが、むろん、頭のなかだけであつて、世のなかとかシステムといふものについては、おそらく無知でした。

たとえば、昭和十一年二月二十六日に二・二六事件が東京で起ります。それを、ラジオで聞いて、新聞で読んで、いつたいどういうことなのか、はつきりとはわからない、政党政治の腐敗、それが東北の農民をはじめとする日本の貧困、および身売りなどをしなければならない貧乏な人々の悲惨、それを生み出している元凶だととつた陸軍の青年将校たちの一種の革命であることは、うすほんやりとわからないわけではなかつたのですが、しかし、事件そのものよりも、むしろ三月にある第一高等学校の受験が、その二・二六事件のために延びて、ぼくという不充分な受験勉強しかしていない男の勉強の時間がふえるかもしれないことのほうに、むしろ関心があるのでした。

ぼくの兄の友だちの明治専門学校の学生が酔つぱらつて遊びにきたり、ぼくの家にくず物を運んでくるくず屋さんのひとりが酒に酔つたりすることがあります。そういうときに学生や自由労働者に近い労働者の口から、「インター・ショナル」が唄われるのを、ぼくは聞きます。しかし、それが、いつたいどういう趣旨の歌であるのか、それについては皆目知ることはありません。政治や

社会についておそれしく無知だったわけです。しかも、自分はそういう政治や社会をもつたこの世の中を、もつともつとよい世の中にしたいという願望を、政治や社会運動ではなしに、思想の力で、あるいは芸術の力で行なおうとして、それが可能であるようなぼんやりとした夢を、自分なりにもつていると信じているのです。まあ、無邪気といえば無邪気な少年です。

同じ頃、小倉中学の同級生の家に遊びに行くと、そこは、二階建てや三階建ての近代建築であり、そこで出される食べ物は、バターーやチーズやソース等という近代のにおいをただよわすものであり、ナイフやフォークも食卓に出るのです。それから、そういう家の同級生は、当時としては近くない福岡まで出むいて、音楽会などに行き、その演奏された音楽のメロディの一つや一つを口にする。そして、蓄音器という、当時ではまだ珍しい器械で、絶えず西洋物の音樂をかけてくれる。それらのすべてのことは、ぼくの家とぼくの環境とぼくの育ちにはまつたくなかつたものです。

そういうふうに、ぼくは、西欧の文物の実際からは離れており、そして、常

民＝庶民という実際からも、ぼくは離れている。いわば、根っこが両方に付いていない。そういうフラフラした中途半端な、一種の浮遊する少年が、ぼくでした。その浮遊感が、やがてぼくに強い不安感と焦躁感を与えます。

中学五年に上がりますと、突然ぼくはそれまでの優等生から劣等生になります。学校には遅刻ばかりする。教室には教科書をもつて行かない。授業はいいかげんにしか聞かない。そのため、一学期の終わりには成績が極めて異常なものとなります。同じ英語のある課目は甲でありながら、同じ英語の別の課目は丁である。同じ数学のある課目は乙でありながら、同じ数学の別の課目は戊である。

何故、そういうことをするのか。ぼく自身の当時の気持ちからいうと、おそらく世の中が、ひいては中学がばかりかしく見えたためです。中学は上級学校へ生徒を進めることを、この上ない価値としている。このために受験勉強をさせる。それについていけない子供たちは落ちこぼれていく。いわば、一種の効率至上主義教育です。

この中学のある北九州一円は、八幡製鉄所を中心とする労働者の街であるとともに、大きな企業や官庁に勤めるサラリーマンの街でもある。それに、漁業あるいは商業の人々がいます。こういう北九州は、十五年戦争が進んでいくにつれて著しく高度成長社会の趣を、八幡製鉄所を中心としてとることになります。すっかり煤煙の街となります。ぼくが母にいわれて畳を雑巾で拭いたりすると、ベットリと「ミミリの厚さで黒いすぐくつついてくるのです。いわば公害の街です。

市民の文化といえば、関西資本が流れきているせいでしょうが、ほとんど関西文化です。土地の文化は福岡や山口と違って、少しも強烈な花を咲かせていません。この町を支えるのは、生活の繁栄という原理だけだ、つまらない、とぼくは思います。ついでに、上級学校への受験勉強至上主義の小倉中学も、じつにつまらない、と思えます。しかも、それへの抵抗は、ぼくに何一つできないのです。そのやり切れなさが、疲いて仕方がない。そのことが、生活のすべてを無視しよう、いいかげんにやつてしまおう、くだらないことだからだらうと思いません。

よそうという、一種のふて腐れ態度をぼくにとらせることになるのです。

青春の入口に立っているぼくが、青春の鬱屈感<sup>うつくつかん</sup>、焦躁感<sup>きょうさいかん</sup>を早く先どりしすぎたということなのかもしれません。ほしかったのは酔っぱらつてること、酩酊感<sup>めいきんかん</sup>だったのでしよう。しかしそれは、中学からも、家庭からも、その他のどこからも与えてもらわぬわけにはいかない。そこからくるふて腐れなのであつたのだろうと思います。

そういうぼくの態度はむろん、中学の側から見れば極めて好ましくない。そこで二学期のある日のこと、担任の先生から呼ばれて、「君、この成績はなんだい。やる気がないのなら中学を退校したまえ」と、いわれます。こちらは待ち望んでいたことなのです。「はい、やめます」。言下にそういうつて退校届を書いて提出します。家に帰つて、いわないわけにはいかないので、母に、「もう、学校はやめたよ」と告げます。母はみるとうちに血相を変えます。黙つて身支度をして、その足で早速中学に行きます。一時間後母は家に帰ってきます。黙つて一言もいわずにぼくの机の上に、ぼくの目の前に、ぼくの書いた退校届

の入った封筒を、封筒」と投げつけます。それで終わりなんです。

母がぼくを叱つたのはそのときと、もう一つ、これは小学校五年の頃に一度あつたきりです。野球熱が少年に伝播していました。ぼくは運動がたいへん下手な少年なんですけれども、グローブを買ってくれとねだります。なかなか買つてくれない。ねだりにねだつて、ついに折れた両親が、当時としては高い値段のグローブを買ってきます。それをぼくは同じクラスの友人に、何故かすぐあげてしまうのです。母はそのことに気がつくと、蒼ざめてその友人の住所を聞いたかと思うと、早速出かけて三十分後に、ぼくがあげたばかりのグローブを手にわしづかみにして、ぼくの机の上に投げつけます。「言も口はきかないで。

ぼくの母は激しい性格の女であつたとはいえないのです。むしろおとなしいのです。怒ることはあつたのでしょうか、それを外側に出すことの少なかつた女です。ぼくも、その二度しか叱られたことはないのです。そしてその二度とも、ぼくの母は行動するけれども、少しも口はきかない。沈黙のままの叱責です。だから、かえつて激しい叱責なのです。

「ああ、きれいな煙草屋ば、やりたかねえ」——この言葉がぼくの前でつぶやかれたとき、ぼくには兄のような……

貧乏な生活を兄とぼくとともに送りながら、しかも、先行きどうなるか理解の外にあるぼくを育てながら、いつたいぼくの母は何を望んでいたのでしょうか。

中学四年くらいのある日のこと、兄のいない夕食の支度を終えてから、母はふつと次のようにつぶやいたことがあります。「ああ、きれいな煙草屋ば、やりたかねえ」。これは、独り言なのです。それを聞いて、ぼくは強い驚きをもちました。

母は、ぼくと向かい合うよりは兄と向かい合うほうが気が楽で、こころがほぐれるようでした。どうもぼくよりは兄に親しみをもつていていました。ぼくは母の、兄およびぼくに対する愛を比べてみたことは一度もありません。

けれども、兄のほうにより深いつながりを覚えていただらうことはよく理解できます。何しろ、母は長崎でその夫に死別して以来数年間、一人つ子の兄をかかえて、おそらく生易しくない生活をしてきたはずです。その間、兄をどうしようか、里子に出そうか、このまま自分と一緒に生きていいかせようか、などと思いつぶねたこともあるに違いない、そういう閑柄の兄なんです。それに、その兄を連れ子してぼくの父と結婚する。結婚してしばらくたつてぼくが生まれて以来は、父の愛が兄にはいかずもつぱらぼくだけに注ぎ込まれることになる。兄はそのことに傷つく。兄はそのことで、ひょっとしたら、ひがんだり、苦しんだり、嫌になつたりするかもしれない。その兄の気持ちを一番よく知つていて、兄が苦しまないように努力してくれたのは、ぼくの家庭では、母以外にないので。だから、母は親しみを、深いところでは、ぼくよりも兄に対してもつていたのに違いないのです。

この母の独り言、「きれいな煙草屋ば、やりたかねえ」。これが、兄に向かつていわれた場合でしたら、兄と母の日常生活の延長の上にある言葉なのです。

兄は、「うーん。そのことを考えよう。まあ、しばらく待つていよう」と、兄は言葉を返す。そして、母を<sup>いぢむ</sup>ることをしたでしょう。しかし、この言葉がぼくの前でつぶやかれたときには、ぼくには兄のような言葉を吐けはしないのです。そのかわり、驚きを覚える。

どういう驚きか。それは初めて母の理想を聞いたような感じなのです。ぼくはその母の願いを知つても、それをどう実現してあげる術もありはないのです。ただ、聞いていてはすぎない。しかも、その母の願望は、今日や明日やその先にも実現させることのめどの立ちそうもない事柄であるとしか、ぼくには思えない、ぼくは何一つ現実の生活の上では力がないですから。だから、母のその言葉は、母の理想を語る言葉のように聞こえました。そして、どんなに母が、きれいではない古物商の仕事にあきあきしているか、その古物商の仕事の与える肉体労働の苦しさに、どんなに疲れているか、それを「きれいな煙草屋ば、やりたかねえ」という言葉が語つているように思えました。ぼくは深くはないにしろ、そのときに、ある傷のようなものを受けたはずです。

そういう母の理想のそばにおくと、中学五年生のふて腐れた生活を送つてゐるぼくの理想は、ずいぶん相隔たつたものでした。ぼくの一つの理想は自殺をすること、もう一つの理想は「知慧と眞理と友情」の極みを自分のものとするために第一高等学校に受かるということ、その二つでした。その二つの間にゆれることができ、ぼくの日常でした。

当時のぼくは青春の入口にいました。ということは、動物力がひどく強くなつたということです。若者になる前の力がいっぱい充実した少年なのでした。その動物力が、死にたいという自殺願望を絶えず裏切るのでした。そしてまた、第一高等学校に入りたいという入学願望、そのための勉強を、たとえばぼくのなかに残つてゐる哲学的な、あるいは文学的な願望が裏切るのでした。

たとえば、ドストエフスキイの『罪と罰』などを読んでは、数週間受験勉強が手につかずと考え込んだりしてゐるのでした。当時のぼくには、いつたいどういう書物を読めばぼくのなかにある問題、それに近寄ることのできない焦躁感を満たしてくれるのか、わかりませんでした。ずっとあとになつて、当時よ

りおそらく十数年もあとになつて、たとえばフランスの文学者、アルベル・カミュの『シユジュボスの神話』を開いて、もう三十歳にもなつていただぼくは、そこに、「自殺こそは唯一の哲学的命題である」という言葉を発見して、どんなに悔しがつたことでしょう。もしも、中学五年生のぼくが、その『シユジュボスの神話』を読んでいたならば、それ以後のぼくの人生はどんなふうに変わつていたことでしょう。そしてじつは、そういうまつたくフランスとかけ離れた日本の片田舎の少年をも変えさせるような書物を書くこと、それがその頃、ぼくのなかに芽ばえていた人生への願望の、じつは基本にあるものだということを知るには、なお当より十年くらいの時間を待たなければならぬのでした。

昭和十二年、中学をビリから数番目の成績で卒業し、同時に第一高等学校の試験を受け、そして不合格となります。その昭和十二年の六月、ぼくが世話になつた宮崎の伯母が死にます。母と一緒に駆けつけます。そのとき、母は少しも涙を流さずに、逆に涙を流してオロオロしている伯母の連れ合い、伯父を励

ましたりしては、母の姉の死によつて生まれた諸々の面倒な事柄の処理にあつておりました。「氣丈な母なんだなあ」と思いました。

中学を卒業して受験浪人の三ヶ月を、ぼくは東京で送ります。生活費は、むろん母と兄とが出してくれました。また、その程度の生活費を出すまでに、ぼくの家の商売は、成長していたことなのでしょう。それに甘えて昭和十三年の春、浪人一年のぼくは一高を受けます。一高にやはり不合格です。受験浪人の二年目を、また東京で続けることにいたします。それと同時に、兄や母からお金を使送りしてもらつて生活することに強い羞いの気持ちをもつことになります。銀座の喫茶店や新宿のキヤバレー、または避暑に出かけたある家族の留守番等のアルバイトをしながら、受験生活の二年目を送ることになります。自分で生活費を稼ぎながら、次第に上の学校へ進むことに疑問を覚えています。自分は庶民の出なのだから、やはり庶民の人々と一緒に暮らすべきではないか。すぐ、故郷に帰つて、職工さんや、港湾労働者等になるべきではないか。しかし、しばらく考えては、また、自分の受験の勉強を続けることにします。そう

いうことを何度も思つたり、思うとまたやめたりの繰り返しのなかで、ようやくぼくは、自分の道というのはやはり上級学校に進む以外にないのだと知るようになります。

### 母の生の辛苦に対する「人生は生きるために値するか」の追求に生活の中心をおいたためだ。

受験浪人の二年を終えて、やつと昭和十四年春、第一高等学校に合格します。入学するとひどく虚脱感を味わいます。肉体が受験生活で弱つていたわけでもないし、疲労していたわけでもない。ただ、自分が「知慧と眞理と友情の泉」を秘むという第一高等学校に入ること、もとよりそのことは手段であるにすぎなかつたのを、まるで人生の目的そのもののように見なして、そして、それに突入していく心の緊張感が、入学とともにふいに消えてしまつて、そのための虚脱感なのです。人生の目的そのものになつていていた一高の合格が果たされたからには、もはやぼくには人生の目的そのものがないような、そういう

虚脱感なのです。その虚脱感のなかで、あらためてぼくは、「人生は無意味なのではなかろうか」という疑い、それに対する答え、その往復運動のなかでゆ

れながら、書物を読んだり、または友だちとつき合つたり、あるいはその問題を考えることの苦しさから逃げでもするように、酒を飲んだり、という生活に入つていきます。

中学の五年生が青春の入口だとするならば、一高に入つてからは、青春の真つただ中です。学校からも世間からも、一人前の大人扱いをしてもらえる。すべては自分の裁量で、自分の判断で自分を主にして生きていける。そのうえ、願つていた通り、家庭教師を、ただし週に六回もして、その収入で自分の生活は自分の手で賄うことができる。自主だし、自由です。

しかし、ぼくの生活の中心は、ほとんど中学五年の頃と同じは変わつていませんでした。学校にはその道のずいぶん偉い先生がたが教えて下さっていたのですが、その授業に出ない、出るとしても出席を稼ぐために出るにすぎず、講義は聞き流しにして、自分勝手に文庫本その他を読みふけっています。

自分の「一番大切な問題」、「この人生は意味があるのか。生きるに値するのか」という問題を追い求めていくには、いつたいどういう本を読まなければならないか、という展望も、ずいぶん開けてきました。中学時代とはまるで違います。けれども、そういう本を読み進んでも、なお、「人生は生きるに値するか」という問題の解決を自分で下すには、本を読めば読むほど、縁遠くなるのです。そうしては、酒を飲む、または友だちと語る、あるいは映画を観る、喫茶店に行く、音楽を聞く、芝居を観るのです。生活のなかには、中学時代のぼくがもたなかつたヨーロッパというものが、どんどん入つてきます。その意味では、ぼくはずいぶん広がりました。中学のときにもつっていた、自分の近代指向、近代化の願望はいやおうなしに果たされることになります。つまり、知識人のタマゴとなることになります。

しかし、考えてみると、高等学校という執行猶予の自由をもつ生活のなかで、ぼくは日本の現実にはむろんのこと、ぼくの母の生きている現実とも、九州と東京という距離の縁遠さだけではなく実質の縁遠さをもつて生きています。

た。したがって、ちょうど青い草原のなかにいながら枯草ばかりを食べている牛のような、そういう生活を送っていたことになります。つまり、観念と現実の乖離のなかに身をおいていたことになります。

ぼくは、中学の五年のときにもつた世のなかの既成概念、大人たちの効率至上主義、そういうものをますます疑つてかかりました。かといって、それではそれにかわる価値をどこに見たのかといふと、それは高等学校の寮歌の歌う「知慧と真理」と友情の泉」のなかに自分が身をおいているという感覚、または錯覚だけがありました。

世の中につながっていない、つながっていないどころか世の中の大人たちの言つたり、したりすることを、はじめから疑つたり否定したりしていたため、世の中から切れていきました。いいなおすと、ぼくは、世の中からの愛を少しも感じることがなかつたのです。世の中からの愛に裏切られる前に、実際に、裏切られる体験をそのときはもたなかつたのですが、しかし、それ以前に、もはや裏切られているという感覚をもつておりました。これは、女からの愛に裏切

られた『金色夜叉』の主人公、間貫の場合と、実態は違うけれども、裏切られたあと、どうしていいかわからないやむをえなき、いらだち、怒り、とまどい、それが与える苦しみという点では、ほとんど似ていたのではないかでしょうか。

そういう、世の中からの愛に裏切られる前にすでに裏切られていたという状態、それから毎日、家庭教師をしなければいけないという労働、文学書や哲学書を主に觀念として受けるための疲労、要するに中学のときの浮遊感がスケールが大きくなつた分だけ、ぼくは大きく疲労してきましたということになります。その奇妙な觀念生活のなかで、ぼくが得たのは、十人ばかりの親しい友だちだけだったのではないでしようか。

そのときぼくは、ぼくの生きている現在に強く疲労し、あきたらないでいて、しかも現実には、ぼくは青春のただ中について酒を飲むのが嬉しいし、友だちとつき合つるのは楽しいし、生きがいでもあつたし、そして、文学書、哲学書を読むことは心の高ぶりを覚えることでもありました。矛盾しています。疲労しな

がら、あるいは、疲労することで充実していた、そういう疲れ切つて元気な青春のただ中にぼくはいたのです。

そのときぼくは、将来に何の希望も抱いてはおりませんでした。自分が行くところは、もはや文学部よりほかはないのです。その文学部を卒業したからといつて、学者や研究者になる気はないし、したがつて、教授や先生になる見込みもないのです。まあ、その当時の一高生のぼくが行なつていたような、毎日、家庭教師に行けば何とか食える、そういう生活がぼくの大学卒業後の、というより、ひょつとしたら将来の生活の姿になるかもしれない、ほんやり思つていたにすぎなかつたのです。そういう点でも、極めて現実とかけ離れていたといえるのかもしません。ところが、ぼくから離れていた現実は、一人歩きをいたしまして、やがてぼくに対して、強い働きかけをしてくることになるのです。

十五年戦争は、次第に泥沼に入つていきます。ぼくの兄は、昭和十四年に出征します。十五年に召集解除で帰つてくる。しかしながら、昭和十六年の夏に出

征します。出征してしまうと、今度は満州に行きます。いつ帰つてくるか、見込みがない。兄がいないと、ぼくの家の古物商、古銅鉄仲買問屋はその中心の働き手を失うことになります。兄嫁はいますが、そういう商売はできない。ぼくの母はそれまで兄の手伝いをしていたにすぎないので、自分が仕事の主役になることは覚束ないし、その才覚もあるとは思えません。そうすると、どういうふうにして母は、兄嫁とともに食べていくことになるのか。兄が仕事からはずれると、ぼくの家の収入は、月収ゼロに近くなるのです。

ぼくは家庭教師の回数をふやして、週に九回として、ぼくの収入のなかの幾分かを母のもとへ送ることになります。その頃、ぼくは高等学校に入つて三年目なのですが、しかし、一年生から二年生に進学するときに、学校の勉強を徹底してさばつていたために落第したので、高等学校の二年生です。しかも受験浪人を二年している。仲間から見ると、ひどく年をくつております。年をくつた学生は、十五年戦争が深まつていくにつれて徴兵猶予の特権が切れることになります。するとぼくは兵隊に行かなくてはならなくなる。兄が兵隊に行つた

あとに、幾分の収入を母の元に送っていたぼくまで出征することになると、いつたい母はどうして生活していくべきなのか。

母はそのことについて何もメソメソしたことをいいませんが、いわれずともぼくにはよくわかります。ぼくは考え込みました。どういう配慮をすれば、ぼくの兵隊に行つたあとの母が生きていくことを続けていけるか。

誰かと結婚するほかはない、その相手の人に、ぼくの兵隊に行つている間、どこかに勤めてもらつて、そのお金で母や兄嫁と三人の生活を維持していくつてもらうより仕方がない、そういうことを考えました。ぼくは養子縁組でもしたいものだと思うようになりました。そして、そのあまりにも功利主義的な考え方には嫌気がさしてまいりました。そのあげく、どうにでもなれと思っておりました。

そのときに昭和十六年、日本とアメリカとは戦争を始めます。その戦争は、直ちに、日本とドイツとイタリアと枢軸三国が、それ以外の自由主義諸国と戦い合う世界大戦へと発展していきます。その戦争の次第に激しくなっていく最

中に、ぼくは詩とか小説、それも戦争とか時局にまるで関係のないものを書きます。それは好んでそうしたのではなくて、ぼくという人間がどんなにその当時の現実から離れた生活をしているのかの、当然な表れであつたにすぎません。

昭和十七年四月に、ぼくはやつと高等学校の三年生になります。その夏、全員の偶然からぼくと結婚をしてくれる、ぼくが兵隊に行つたそのあとには母と生活をしてくれる、そして母のために生活費を送ると約束もし、また実行もできる女性と知り合います。

ぼくは徵兵検査を受けます。学生の徵兵延期の特典が、年をくいすぎたぼくにはもう切れてしまつたのです。昭和十七年の初夏、甲種合格となります。翌年昭和十八年二月に、奈良の通信隊に入當することになります。

ぼくは昭和十七年十月に、東京大学の哲学科に入学します。そのとき大学では、教練が必修となります。つまり、教練の単位を取らなければ、卒業することはできない仕組になります。しかし、ぼくは教練に一日も出席しないのです。

それどころか、せつかく入った大学の哲学の授業にも、ほとんどまつたく出席しないのです。

何をしていたのか、やはり小説や詩を読みながら、空しくどこと生きる意味を見つけていいのかわからないままおります。だが、少なくとも、それから逃げないこと、それだけを自分の生きる目的に擦り替えて生きていきます。ぼくは家庭教師をします。

昭和十八年二月に、ぼくは奈良に入隊します。ぼくの学生帽を見て、軍医少尉は、「即日帰郷だ」といつてくれます。たぶん、学業半ばに兵隊になる男への哀れみだったのではないでしようか。

その奈良から帰つてすぐ、ぼくの出征のあとを見てくれるといった女性と結婚をします。上京して来た母は、たいへん喜んでくれました。

即日帰郷で帰つた男には、すぐまた、再検査というものが待つております。

ぼくは、昭和十八年の五月下旬に再検査を受けなければならぬことを、その年の三月に知ります。知つたその日から、ぼくは減食します。あと一ヶ月で微

兵検査という日からは、固体物をやめて、水とスープだけで自分を養つていきます。先年の徴兵検査のときには一六七センチ、六〇キロだった体が、五月下旬の二度目の徴兵検査のときには、一六七センチ、四〇キロとなります。

徴兵検査官は「なんだお前、死相が出ているじゃあないか」と、眉をひそめて、ぼくに『丙種合格』という判定を与えてくれます。ぼくはわざと体を悪くして、そして、徴兵を忌避したのです。

その昭和十八年の十一月十五日に、ぼくに長男が生まれます。ぼくは子持ちとなりながら、大学にはほとんど出づに、しかし一週間九回の家庭教師を行なつて、妻、子供を養い、残つたお金を母に送るという、そういう生活を続けていきます。

やがて昭和十八年の終わりに、兄が、戦地から帰つて来て、召集解除になります。兄はもう、時局の進み方の激しさのために古銅鉄仲買問屋を営むことができないので、兄嫁の里のある横浜市に兄嫁と一緒に移つて来て、そこで軍需工場に勤めることになります。母も、むろん一緒に兄と住みます。ときおり、

ぼくの家、ぼくの妻と子供のいる家にやつて来ては、孫の面倒などを見ております。ぼくの妻は思ひたつて受験勉強をして、ある私立の大学に入学して、昭和十八年の四月から大学生となります。その手伝いに、母がしばしばぼくのところに泊まり込んでくれることになります。ぼくの身の回りの世話をしてくれることになります。

しかし、あるとき母は、突然叫び出すのです。

「私は子守りじゃなかけん」

ぼくの知らないところで、妻との間に、ようほど嫌なことがあつたのでしょうか。そういう母の生きる上での辛さに對して、ぼくはあるで無知であつたし、思いやつてあげようともしておりませんでした。だが、そういうぼくの思いやりの足りなさは、それはどこから生まれてきたのか。もつぱら、ぼくが自分の観念論、いわば「人生は生きるに値するかどうか」ということを追い求めることに生活の中心をおいた、その観念論の生き方のためなのではないでしょうか。そういう観念の問題に深入りする男は、おのずからそれ以外の問題には感じない

い状態になつてゐるだけではなくて、それ以外の問題に對して、おそらく酷薄な心情をもつて至つたのではないか。そういうぼくの問題以外のすべての人事、あるいは人間に對する酷薄さを、いつしかぼくはもつことになつていたのです。その酷薄さは、その後ずっと、ぼくのなかで張よみこそすれ、薄れてはいかなかつたのではないでしようか。

昭和十八年が過ぎ十九年となるにつれて、戦争下の日本の現実生活はますますきびしくなつていきます。ぼくも、兵隊は逃れたものの、勤労動員を逃れることができずに、中島飛行機製作所等に駆り立てられて、アルバイトというより、むしろ強制労働をさせられることになります。

昭和二十年三月二十六日に、思いがけず横須賀海兵團に「三月三十一日入當せよ」という、赤紙が舞い込んできます。わずか一週間の猶予しかない。そのなかでは、ぼくも自分の体をこわす時間はない。ぼくは四月一日の朝早く、近くの千駄ヶ谷の駅で、家族や、友人に見送られて国電、当時は省線といいましてが、省線のなかに身をおいて出発して行きます。ぼくの母は、「元気でね」

というだけです。それ以外の言葉を口から出さない。相變らず無口なのです。しかし、「死んではいけないよ」という母の無言の言葉を、ぼくはむろん自分の心で感じ取つておりました。

海兵団に入営して八日で、ぼくはまた、千駄ヶ谷駅に戻つて来ます。ぼくはどうしても兵隊になるのが嫌で仕方がなかつたのです。そのために、自分が強度の神經衰弱であることを軍医の前で演技しました。軍医はたぶん、それが嘘であることを、芝居であることを、見抜いていたのに違ひありません。しかし、ぼくがまだ大学の哲学科にいる学生であることを、やはり裏れんてくれたのではないかでしようか、「即日帰郷だ」という判定を下してくれたのです。

当時のぼくの家は原宿にあつたのですが、電話もない家ですので、いきなり玄関口から帰つて行きます。すると、台所から母が立つて、お客様だらうと思つて現れます。それはお客様ではなくて、ぼくです。すると、母の両眼からパラパラパラッと、涙が噴き出ました。しかし、それだけなのです。手を握るわけでもない。「よかつたね」というわけでもない。そして、ぼくもま

た、母の手を握るわけでもない。「よかつたでしょ」と、いうわけでもない。しかし、その場合、ぼくらの間には動作や言葉は必要ないのです。

いよいよ戦争が激しくなつていきます。九十九里浜と相模湾に、アメリカ軍による敵前上陸がそのうち行なわれる。東京に残つた民間人は、竹槍か何かでそれを迎え撃つて、みな、銃火の犠牲になつて死ぬことになるだろう。そういうことが、秘かに、しかも權威のある筋からといふ注のついた情報として、民間人のなかに流れています。

ぼくは、ぼくの母とぼくの妻と子供を、縁故を頼つて福島市紫内にある地主さんの屋敷の一画の蚕部屋に住まわせてもらうことにして、疎開させます。ぼく自身はまだ大学の三年生であつて、しかも卒業見込みのない三年生であつて、やはりいつ勤労動員の命令を受けなければならぬかわからないのです。勤労動員など行く必要もないし、大学も辞めてもよいのですが、しかし妻や母と一緒に疎開しても、疎開した土地で食べられるわけでもない。やはり残つて東京で家庭教師などをしていくほかはないのです。

## 炎の一本道

コワイヨーコワイヨーナムアミダブツヨ  
－バカバカバカナクンジャナ－イ

昭和二十年五月二十一日、疎開先の福島から、ひよっこり母が上京してきました。

当時は、列車の乗車券はたいへん入手しにくいのです。まさかの折りには、この人に頼んでみてごらんなさいと、NHK福島局にいる友人のことを、ぼくは母にいいおいていたことを思い出しました。たぶん、母は九州とは何もかもが違う東北の福島での暮らしが嬉しくなかつたのでしょう。ぼくの紹介状を見せて、ぼくの友人から列車の切符を世話してもらつたのです。ただし、帰りの

分は東京で買うほかありません。

もう少し福島で辛抱してくれてればよかつたのに、わざわざ切符も買いにくければ物資もない東京へ出てきたりして、母さん。

口には出しませんが、ぼくはいくぶん当惑しました。しかし、母は、「田舎は物々交換でしか食糧が入らんけん、東京に残した着物を運んでほしいって、あんたの奥さんにもいわれたもん」といつて、何やうはしゃいで、背負つて帰るための荷物を作つたりするのです。

妻の実家は、原宿駅のそばにありました。妻の父親はかなり前に亡くなっています。妻の母親はお茶の先生で、その両親は大日本茶道学会の会長と副会長です。妻の実家は妻の弟にまかせてあり、ぼくは、その茶道学会の本部の家に五月に入つて、妻の母親とともに寄宿しています。それで、上京してきたぼくの母も、一緒に泊まらせてもらうことになります。縁続きではあるものの、よそのお宅です。あまり御迷惑をかけてはいけない。それに、東京にいたところで、戦時中ですから、母の仕事もないのです。

早速、福島への帰りの切符を、母の上京した翌日、渋谷駅まで買いにゆきます。並んでいる列は二十四日の乗車券を待つています。ぼくも列のうしろにつきます。ところが、なんということでしょう。ぼくの一人前まで、当日の発売券は売り切れとなつたのです。二十五日の乗車券がほしければ明日並びなさい、といわれます。がっくりします。しかしやがて、がっくりぐらいではすまないことになるのです。わずか行列の一人の違いが、母とぼくの運命を大きく狂わせてしまうこととなるのです……。

翌日五月二十三日、朝早くから行列して、五月二十五日の夜十時半上野発福島行きの切符を一枚買うことができました。ほつとして、止宿先の四谷左門町都電停留所前の大日本茶道学会へとつて帰します。すると、その夜、東京の山手の新宿、渋谷、四谷の一帯は大がかりな空襲を受けることになります。

米空軍による東京空襲は、昭和十九年十二月から昭和二十年二月までは、小手試しという感じで、数キロに及ぶ爆弾を投下しはしますが、範囲は小規模でした。しかし、三月十日の下町一帯への空襲は大規模となり、しかも焼夷弾を

中心にしたのにかわり、十万人に及ぶ死者を出しました。高校のぼくの親しい友人、高橋哲男も、火の海のなかから帰つてきませんでした。

空襲はじつに無残です。おそろしい限りです。ぼく自身も、ひどくこわい体験を、それまでにもつていました。

その年の二月中旬のことでした。当時、ぼくと母は、原宿駅そばの妻の実家に身をよせていました。用事でみんなが出払つている夜、空襲にありました。大きな爆弾の『ドシードドオン』という激しい音の響きが、次第に近づいてきます。おとなしく部屋のなかにすわっている気にはなれません。母をうながして、畳の下に造つてあつた深い防空壕に、一緒にぐり込みました。だが、つきつぎに落とされる爆弾の音は、いつそう身近に迫ってきます。それどころか、ぼくと母をぐるりと取り囲んで、その音の輪をだんだん縮めてくるのです。それとともに音の響きが変わつてくるのです。

ズズーッングワリグワリゴーグーンムオーンウオ。

大地が割れるような凄じい地響きなのです。しかも、落下点がひどく近い。

飛行機はもう頭の真上ではなかろうか。空氣まで、いや闇そのものまで、ビリビリと裂けてゆれるのです。きっと、ぼくと母は直撃弾をくらうのではないか。

観念しました。母の手を握りました。すると、身ぶるいした母がいきなり大声で呼びだしたのです。

コワイヨーコワイーナムアミダブツヨー。

ぼくはびっくりしました。母は一度も大声を立てたことのない人でした。それに、子供のような泣き声なのです。これも、それまでのぼくの聞いたことのないものです。

しかし、次の瞬間、今度はぼく自身にぼくはびっくりしました。なぜって、ぼくが自分でも思いがけない叫び声をあげていたのですから。

バカバカバカバカナクンジャナーリ。

あまりの荒々しい言葉に、ぼくは自分であきれはててしまします。ぼくはそれまでに一度も母に向かつて、無礼な口をきいたことはない息子なのです。だ

が、そんなぼくと母との予想もしなかつた小さなドラマを、容赦なく爆弾の音はゆさぶりあげて響いてくるのです。

ズドーンウワリグワリググオツガア。

するとまた、母が叫ぶのです。

コワイヨーコワイヨーナムアミダブツヨー。

その叫びに、ぼくは自身の叫びをおつかぶせます。

バカバカバカバカナクンジャナーリ。

すると、またまた爆弾の音が、いつそう空気を激しく引き裂いて響いてくるのです。

ズズズズーングワリガツキュググーン。

そして、たちまち母が叫び、すぐさまぼくが叫ぶのです。

こんなことが、三度四度繰り返されました。もう死ぬんだな、と思いました。

文字通り生きた心地もありません。

そのある瞬間、母がふいにぼくの手を引きよせました。そして、ぼくの手に

封筒みたいなものを押し込みました。それが何であるのか、何のためなのか、たしかめる余裕などありません。二人とも恐怖で、他人が見れば蠟人形のようになつて、硬直していたのではないでしょうか‥‥‥。

本当に、空襲はこわいのです。ぼくと母も、もうこりてしましました。

そういうぼくと母がまた、五月二十三日の夜に空襲にあうのです。いやだよ、まつたく、と思いました。

しかし、案外こわくなかったのです。夜九時頃、空襲警報が鳴るとまもなく、止宿している大日本茶道学会本部の向かって左の奥の、四ツ谷駅のこちらと思えるあたりに火の手がいくつも上がり、それは爆弾ではなく焼夷弾であるらしく、凄じい響きは聞こえません。

「火の手は近いぞ、みなさん」という隣近所の防護団の人々の声がするとすぐ、続いて落とされた焼夷弾のために違いありません、ずっと近くに火の手が数本、これはずいぶん明るくあがります。そちらのほうから、風も吹き起こつてきています。

妻の母の両親の会長と副会長、このかたがたは六十歳すぎですので、最寄りの信濃町駅の向こうの神宮外苑に、妻の母に連れそつてもらつて避難します。

ぼくの母も一緒に、というのですが、もう少し残つて様子を見るというのです。

福島の田舎へもつていって食糧と物々交換するための、ぼくの妻の着物を荷作りした行李、それがぼくの手で玄関まで運び出されています。母はそちらに気持ちが残つているもようです。ぼくは若者ですので、隣近所の人々とともに防火につとめる義務があります。

だが、その夜の火のまわりかたは、アレアレと声を出すまもないほどの速さでした。大日本茶道学会本部の建物にも、すぐさま二階から火が移つて、階下に向かいます。防火しようにも、バケツに水を入れて四、五人でリレーしたくらいでは、気休めにもなりません。あたりの人々も、たちまちあきらめます。そして、「もう逃げよう、愚図愚図してると生命が危ないよ」と声を出して、早速いなくなつてしましました。

玄関先の妻の着物の行李に火がつきます。ほんやり、ぼくはそれを見ていま

す。もつと前に、背負つて神宮外苑へ行くことを考えついでいたら、救えなかつたことはないのです。ひよつとしたら、今でも遅くないのでは……。

母もその行李を見ています。もつたいない、と思う気持ちはぼくよりはあるかに強いのではないでしようか。それがあれば、疎開先での、ぼくの妻と子供の、ぼくの母の嫁と孫との一ヶ月分の食糧は確保できるのです。

けれど、母もぼくも、何もいわず、何もしません。さつきと横を向いて、黙つて神宮外苑の方へと歩いてゆきました。

翌朝、四谷左門町へ戻つてみると、大日本茶道学会本部が焼け止まりになつて、そこには地下室だけがもとの形を残して、あとは何にもありません。妻の弟が原宿から駆けつけてきて、妻の実家も灰になつたと報告します。一族は着のみ着のままになつたわけです。だが、誰の身にも何の怪我もない。それを、お互いに喜びあいました。すると、何もかもが無くなつて、いつそせいせいした思いが、みんなのなかから湧き出てくるようで、冗談までも飛び出したりして、むしろ陽気でした。

前夜の空襲の軽さが、ほくたちに、少なくともぼくに、こつそり油断のようなものを注ぎこんだのではないか、と思います。

この五月二十四日、ぼくたちは、近くの当時の四谷区役所に罹災者への炊き出しの食事を受けにいきます。妻の母の両親は、焼け残りの地下室に雨露をしのぐだけのかりの屋根をつけて、そこに泊まります。この大日本茶道学会本部の横の道を四百メートルほど入ったところに、宗福寺というお寺があり、その離れの一室を、妻の母は借りうけます。そこに、ぼくと母は泊めてもらいます。妻の着物をつめた行李は、みごとに灰になってしまっています。そうなつてしまつたからには、母の上京は無意味になつてしまつたわけです。たぶん、母はそれをぼやいたに違ひありません。妻の母は、しきりにそれをなだめただことでしょう。

しかし、母が上京して以来のその日までの母の言動を、ぼくは少しも覚えていないのです。無関心だったわけはない。ぼく自身が、ひどくぼんやりしていたのではないでしょうか。

米軍の房総半島および相模湾の上陸作戦によつて、日本は負ける。そして、ぼくも死ぬ。それは避けられない。もう、やむをえない。それなら、その最後の日まで、ぼくは文学と哲学を読み、詩を作つていよう。ぼくは、そう思つていました。講義のない大学は行くに及ばず、勤労動員は逃げる。ぼくは死を待つという口実のもとで、外部の現実から無関係に暮らしていっていました。そのことが、たぶんぼくに虚脱を与えていたのではないでしょうが。

そしてまもなく、その虚脱からぼくは、手ひどい復讐복수(?)を受けることになるのです。

シャランヤラシャラシャラシャラシャラ  
ミシミシバリリバリリミシリ

五月二十五日になります。

この日も、夜になるまでのことは、母についてもぼくについても何一つ思い出せません。仕事がないので、ほとんど宗福寺の離れにいて本を読んでいたは

すです。だが、どんな本なのか、はつきりしません。

夜の九時頃、母を上野駅まで送るため、妻の母とともに宗福寺を出ます。十時半に上野駅を出る列車には早すぎるのですが、戦時中のことなので、用心したのです。ところが、途中で空襲警報が出ます。信濃町駅につくと、電車はないといわれます。やむをえません。宗福寺の離れに引き返します。

離れの縁側は南向きです。ガラス戸が開け放たれています。電気を消した暗いなかで、しばらく南の空を見上げています。日本の陸軍の探照燈の光が三条四条、交叉しています。物音が絶えて、静かです。すると、まもなく、空のはずれから米空軍機B29が五機、六機と姿を現します。シャープペンシルを横にしたような姿が宙に光って、ずいぶん綺麗です。兇悪なところは少しもない。ぼくは舌<sup>つ</sup>氣<sup>き</sup>に眺めています。そして、空襲がこれから始まるうとしていることを知つていながら、巻き煙草に火をつけて二服も三服もするのです。

だが、その煙草を吸い終えたという自覚はありません。いきなり、部屋の一方の壁だけが明るくなります。そこに、物の姿が大きく映つてゆれます。見る

と、ぼくが煙草の灰を落としている吐<sup>は</sup>月<sup>づ</sup>峰<sup>とう</sup>を入れた煙草盆と、それにはぼくの腕ではありませんか。

ぼくはびっくりします。只事ではない。あたりの様子がいきなり緊迫しています。そして、薄い錫<sup>すず</sup>か何かの箔<sup>はく</sup>をいくつも打ちたたくような金属音の連続が降つてきているのです。

シャラシャラシャラシャラシャラシャラ。

縁先の狭い庭に目を落とすと、そここの草の葉の一枚一枚が繖形花序みたいな炎を、花のようにつけて、輝いているではありませんか。

妻の母を先頭にして、ぼくと母は、その狭い庭と反対側の玄関から、おもてに出ます。そこは植込みの樹木をぬつて、狭い石畳の道が「コ」の字をつくり、それを突き抜けば二メートル幅の道に出ます。その道を左手にとつて四百メートル行けば、一昨日燃えた大日本茶道学会本部の焼け跡につけます。だが、玄関を一步出ると、ただちに金属音をたてて、炎のむれが降つてくるのです。

## シャラシャラシャラシャラシャラシャラ

次から次へと続く炎のむれは、あつというまもなく、植込みの茂みの葉と木の、そのほとんどの上におりてきます。そして、そのまま花びらをひろげた花のように、いや、もう燈明皿とうめいわんの油のなかの燈芯とうしんのように、いつせいに燃えたのです。あたりはもう、一時に数多くのフラッシュをたかれた舞台のように、まぶしくて痛いのです。ぼくはたじろいでしました。玄関先に立ちすくんでしました。

ぼくは、ほおつとなつたわけです。そのため、ごくわずかな時間ですが、正気に遠いことをしました。

玄関脇に火叩きが立てかけてあります。いきなり、それを手にとつて、植込みの茂みの炎の花を叩き消そうと、振りまわしはじめたのです。だが、相手は油脂焼夷弾とうしきやういだんなのです。油脂は火叩きの先で押しひろげられて、ますます燃えつのるだけのことです。そのことにぼくが気づくのに、三分位はかかりています。そのために手遅れになつたのだ、と知るのは、ずっとあとになつてのことです。

気づくと、妻の母はもういません。植込みの間の石畳の道を走り抜けていつたのでしよう。ぼくの母だけが、ぼくのそばに立つて、ぼくの火叩きを揮ふるう姿を見つめていたのです。つまり、ぼくを待つててくれたのです。

ぼくは母の掌てをとりました。妻の母のあとを追うようにして、植込みの間の石畳の道を突ききりました。表の道に出ます。それを左手に行けば、大日本茶道学会本部の焼け跡へ行けるのです。だが、いつのまにそんなことになつたのでしょうか。その二メートル幅の道の左右の家と樹がめらめらと燃えあがつていて、ぼくと母を待つているのは、炎の赤いトンネルなのです。そこを突き抜けることなど、できはしないのです。

だが、ここでもぼくはまだぼおつとしていたようなのです。どうやら判断が正確ではなかつたようなのです。炎の赤いトンネルでも、むしろそれをかいくることをしたほうがよかつたのです。あとで知つたところでは、それは三十分ほど長さのトンネルでしかなかつたのですから。

ぼくは、あたりの状況について暗かつた、というより無知に近かつたのです。

宗福寺はもとよりその周辺は、ぼくには初めての場所であつたうえに、もともとぼくは道を覚えず、方向にうといのです。

それからあとのこととも含めて、その夜のぼくの行動は、いちいちツボをはづれていきました。

また、離れの玄関にとつて返します。だが、どこへ行けばいいのか。南のほうを見れば、二百メートルほど先を東西に省線電車が高架の上を走り、その高架をくぐった向こうには林にかこまれた東宮御所があり、そこは焼夷弾の攻撃を免れて、まだ黒々と静まり返っているのが見受けられます。

東宮御所へ出よう。だが、そこへ辿りつくにはどういう道を行けばいいのか。ぼくは離れの横に出て、目的地までの地理を見定めようとします。離れの先是崖になつて切り立っています。宗福寺そのものが、海に突き出た半島のようになつて、崖地を見下ろす大きな岩盤の上にあるのです。崖地は省線電車までの南北の長さが二百メートル、そして、宗福寺から四ツ谷に近い小山までの東西の長さが百五十メートル、こういう矩形の地域だな、と受けとります。この

崖地には木造家屋がたてこんでいます。だが、まだ一軒も火を噴いていません。家々の青黒い屋根瓦が大きな蛇のウロコのように妙になまめいて、ぬるつとした艶を見せていました。

離れの裏の庭のあちを歩くと、木梯子がかかつています。母の手を引いて、ぎしぎしいわせながら降りてゆきます。すぐ、道は二手に分かれます。目的地に近いと思われる方をえらびます。自転車とりヤカーが置きっぱなしにされている。コンクリートの防火用水槽がむき出しにされている。だが、人影に出えないのです。どつちへ行けば安全なのか、誰にも聞けないのです。それでも、どうにか、高架下に通じる三メートル幅の道まで出ることができました。

だが、そこは火の粉のまじつた激しい突風が吹いているのです。立つていることも難しいのです。しかし、ぼくは母の手を引いて、突風のなかを進もうとします。高架下の向こうへ突き抜けなければ、東宮御所へは行けないので。でも、突風が強くて、そちらのほうへは、二歩進んでも一步押し戻されるのです。すると、防空服装に身をかためた屈強な中年男が、ふいに高架下からやつ

てきて、「ダメですよ、どうでいいちは」というのです。「では、どこへ行くといいんです?」とぼくは聞きます。だが、「そう、よくわからないですねな」と、相手は大声で叫ぶだけなのです。ぼくは引き返すことにします。

しかし、ここでもぼくは判断をあやまつたようなのです。のちになつて知ったのですが、高架下から東宮御所を含めた一帯は焼けてはいないのです。たとえ息がつまるにしろ、這つてでも高架下を突き抜けるべきだったのではないか。

これ以後のぼくの行動は、もう袋小路のなかをあちらこちらへとさまよふことでした、次第に喘ぎを激しくしながら。

崖地だけは火がついていないのです。だが、一足そとへ抜けようとする、必ずそこは火が噴いているのです。まんまと相手の術策にはまつたという感じです。

残るところは、もう崖上の宗福寺しかないのです。さつき降りてきた木梯子を、さつきよりはるかに激しくしませながら、ぼくが先に立つて母の手を引けます。

いて、のぼつてゆきました。

離れには火がとりついています。その離れの西側は、すぐ崖になつてそびえていて、その崖の上の家々はもう燃えあがつています。離れの東側は本堂です。これにも、もう火がとりついています。その前を通り抜けると、墓地に出ました。ここは、小学校の体育館ほどの広さです。そして、小学校の体育館のように、矩形の土地です。それが、やはり半島のように突き出て、崖地の家々の屋根の青黒い瓦の波を見下ろしているのです。その墓地には火がついておりません。そこに辿りついて、崖地に近い大きな墓の前で、ともかく一休みして呼吸をととのえることにしました。

だが、それからあとは、希望の輪がどんどんせばまつてくるのを見せつけるためにだけ流れる時間なのでした。

この矩形の土地の周囲は、崖地にのぞむ一方だけをのぞいて、ますます火の勢いを奥深く強めるばかりです。先ほどは省線の高架下のあたりだけに吹きあれていた突風も、今は火の巻き起こす烈風に合体したのか、どうどうという音

をたてて、中空を舞っています。それは渦を巻いて火を運ぶのでしょうか。風の音が走るたびに、あたりの火の色が濃くなつてゆくのです。

こういう時間が、時計の針でいえばどれほど廻ったのか、よくわかりません。ぼくと母は、その場に立つて、動かないでいることしかできません。しかし、時間は次第に変質していたのです。ふと気づくと、墓地の家々の屋根が燃えはじめているのです。そして、宗福寺の本堂も火を噴きはじめているのです。急に空気が焦げてきました。

それ以後、時間の流れは急速に赤くなりました。黒いレンガ色から赤いレンガ色になりました。

ふいに、泣き声があがります。

「オトウサーン、ドウナルノ、コワイイ」

「タスケテ、オカアサーン、ドッカニイキターイ」

振りむくと、墓地の片隅に大木があつて、その下に二十名近くの男女がむらがつて身をよせあつていて、そのなかからの黄色い叫びなのです。父親や母親

が何と答えているのか、その声は聞こえません。だが、じつさいは何と答えようもないのではないでしようか。墓地だけが燃えていない場所なのです。周囲は火の風なのです。どうしたらしいのか、誰にもわかりはしないのです。

また、どれほどの時間がたちました。頬を打つ風が熱くなりました。そのはずです。墓地の家々の屋根が火を噴いて燃え立っているのです。これで、わずかに青黒く残っていた一方も、もうすぐ赤い火の壁となるのです。赤い色の壁の包囲はまもなく完璧なものとなるのです。

「たいへんなことになつたぞ」と、ぼくは声に出して叫きました。「畜生、やりやがつたな。いくぶん、おかしな言葉です。独り言ですが、相手があります。「やりやがつたな」という文句を投げかけているその相手は、だが、どういう存在なのか。運命を握る存在、とでもいうよりほかはない。

せつぱつまつて、もう押すも引くもできない、そういう事態に追い込まれると、人間は運命を握る存在のようなものを目の前近くに引きずり出してきたがるのでしようか。

これ以後、ぼくは幾度か独り言をいいます。でも、嘆いたり、訴えかけたり、泣きことをいつたり、そんなめそめそした言葉は吐いておりません。ぼくの性格が強いから、などという理由ではない。どうもぼくを取りかこんでいる火というものは乾いて即物性と攻撃性に富んでいて、そのうえ行動性が強くて、それが詠嘆などをぼくに許してくれないので。それがぼくから余裕を失わせたのです、といつてもいいかもしない。火のなかで、明らかに、ぼくは昂ぶつていました。沈んでなどいませんでした。

やがて、また時間がたちます。だが、時間の観念など、もうぼくから消えさっています。乾いて蒸発したのでしょうか。それほど、火の勢いがきついのです。風はいくぶん落ちたようです。ぼくの頬を打つことをやめています。だが、そのかわり、ぼくの顔の皮膚の上に、分厚く熱い空気の層が、まるでマスクのようにながれいかぶさっているのです。息苦しくなります。

ミシミシバリリバリリミシリ。

おせんべいを割るような音がします。墓場のあちらこちらの十数か所には、

卒塔婆そとうばが数本ずつ集まって立てかけられている。それに火が移つて燃え出しているのです。とんだことになつたものです。これでは、墓地も安全地帯ではなくなるのです。さあ、愚図愚図せずに何とかしなくつちやあ。だが、愚図愚図することができるだけなのです。

右手をこちらへ押しやるのです。「一度も三度も四度も。  
「行け、走り抜けなさい、わたしにかまうな」と。

母の顔を見ます。先ほどからずうつと、母はぼくのそばに立ち放しで、激しくつのつてくる火の姿を見ているだけです。何もしないし、何もいいません。しかし、母もまた運命のような存在を相手にして、語りあつていたのではないでしようか。その相手は、ぼくの場合より宗教の匂いが強いに違いない。仏様とかおとんと様ではないでしょうか。ぼくよりも強い、悟りとも諦めともつかぬ感情の色を、母の顔にぼくは読み取りました。

しかし、母の顔からちらと目を移して、ぼくは驚きました。母の防空頭巾づきんに

親指ほどの火の粉が三つもくつついでいるのです。ぼくはすぐ手で払い落としました。すると、母は母で、ぼくの肩に手をあてて動かすのです。見ると、ぼくの身体にも火の粉が四つほどくつついでいるのです。

しばらくは、お互の上半身に降つてくる火の粉を払いあうことに、ぼくと母は熱中しました。しかし、手が速く動かないのです。緩慢な動作なのです。もし、他人が見たら、見えない羽子板はごいたでもついて遊んでいる母子のようにでも思つたのではないでしようか。ぼくは苦笑いをしました。

しかし、ふと気づいて、ぞおつとしました。このままどんどん火の粉が降り続いたら、打ち払いようもない。そうすれば、母のモンペとぼくの学生服が焼けて燃えあがつて、母もぼくも火だるまとなつて死んでしまうのではなかろうか。いよいよの時がくるぞ。覚悟をきめなければならないぞ。

だが、覚悟など、いつこうにきまらないのです。覚悟とは、日常の生活のなかで重大な態度決定を迫られる場合での、未練を断つ心の用意のことです。火にとりかこまれているという非日常にあつては、未練を断つにも、断たなければ

ればならない未練が何もないのです。そこにいるよりほかには、何をどうすることもできないのですから。いわば、うむをいわせぬ状況の力が、ぼくに一切の未練を断たせているのです。

これは、こわいことです。人間らしい情念の一切をも断たれることにつながるのですから。げんに、ぼくには、どうしても生きてやるぞ、という気持ちはわざわざこつてきていいないので。どう考へても脱出することはできない状況だと思わざるをえないところまで、追いつめられているためでしようか。ぼくにはぼく自身を救い出してみせる、そういう気持ちも噴きあがつてきていいのです。それまでのぼくに、ぼく自身を大切にする思いが少なかつたからなのです。しようか。それは、たとえば神というようなぼくを超えるおおきな存在をぼくが信じておらず、したがつてそういう存在の発する命令の一つ、「生きよ、死ぬな」、これを絶対の声としていただいていなかつたためなのでしょうか。つまりは、ぼくが無神論のニヒリストだったためなのでしょうか。

そのうえ、そのときのぼくは、ぼくはともかくとして母だけは救い出してみ

せる、そういう気持ちも抱いてはいないのです。なぜでしょうか。これは、はつきりしています。母への愛が足りないからなのです。そして、ぼく以外の人間の生命の大切さが、なまなましい切なさでぼくにわかつていなからなのです。

熱でも出したように、ぼくは上気して、ただぼおつとしていました。覚悟などできません。ああ、ここで死ぬんだろうな、と思うばかりです。そう思つたからといって、だからどう気持ちが変わる、ということもないのです。

やがてまた、ふつと少しだけ目が醒めたみたいな瞬間が訪れます。すると、熱いのです。やたらに熱いのです。

思わず、自分で自分の服に手をふれてみます。布地がごわごわにこわばつていて、焦げかかっている餅の皮のようにふくらんでいます。ふいに思いつきました。水をかけたら、どうなるのだろう。ぼくは小便をしてみました。もちろん、垂れ流しです。すると、ズボンがバリバリと音をたてるのです。

ひでえもんだな、とぼくは独り言をいいました。独り言をいつてから、自分

が眠くなつてゐることに気づきました。頭を振つて、目をぱつちりあけようとします。そして、そのときになつて、やつと、先ほどに比べて、あたりがずいぶん明るく輝いているのを知りました。

墓地の東も北も西も、すべての家が、ここを先途せんとと燃えさかつてゐています。墓地の崖下の窪地の家々も、屋根にしろ壁にしろ、黒ずんだところは少しもない。炎に赤さは減つて、電燈のようなオレンジの色が濃くなつてゐるのです。墓地の崖下の窪地の家々も、全部燃え立つています。ただ、これは炎に赤さが濃いのです。そして、その窪地の家々に続く中空から上空は、まるで馬肉の色になつて、分厚く赤いのです。その中空から上空を目で追つて、墓地の東と北と西を見わたすと、馬肉の色はいくぶん濃さを薄めながらも、ぼくの真上のあたりでつながりあつてゐるのです。

ぼくには、富崎の伯母の家にいた頃、毎朝がまどに薪をつき込んで御飯を焚いた経験があります。今、あのかまどを大きくしたもののが、ぼくと母はまるごと入れられているのだなあ、と知りました。やりきれないや、とぼくは

独り言をいいます。すると、いくぶん睡気が去つたような感じがしました。

あらためて、墓地のなかを眺めてみました。大木の下に集まつていた二十名ばかりの男女は、崖下が燃えてきたためでしよう、退いて墓地のなかほどに分散していました。だが、その墓地の卒塔婆はもう焼け落ちたらしく、立つている姿は見受けられない。しかし、その卒塔婆の焼け残りのためなのか、墓地の青い雑草がぶすぶす焦げて、なかには炎をあげているものもあるのです。そのうち、墓地そのものが、外側からの炎と内側からの炎で、まるごとからめとられるのではないでしようか。いつまでも、ここに身をおいておくことはできないのです。

ほんとにほんとに、どうしようもないんですね、納得しましたよ、逃げられようのないつてこと、と誰にともつかず、ぼくはつぶやきかけました。

そして、その自分自身のつぶやきに、ぼくはハツとしました。そうか、逃げられようもない、か。そうか、逃げなくとも、逃げても同じだつてことだな。同じだというのなら、いつそ逃げてみようじゃないか。逃げてみてダメでも、

もともとじやあないか。そう思いました。

この思いには、情況に対する反抗心や障害に向かつての敵意<sup>のき</sup>心など、こもつていませんでした。むしろ、物憂さがこもつていました。だるい感じで、そう思つたのでした。

いつぼう、ついさつきから、ぼくは誰かの雪山の遭難の体験記から受けた知識を思い浮かべていました。こんなとき、眠いのは危険、眠りこむつてことは死ぬということだから。だが、炎につつまれたなかで、眠らないでいようとすれば、動くよりほかはない。

よし、それでは、この場を脱出することにするか。そのためには、この墓地をとりまく炎のなかを突破して、宗福寺の前の道に出で、左門町の大日本茶道学会本部の焼け跡へ辿りつくほかに、道はない。ぼくは、そう自論見を立てました。

だが、ここはそれこそ、文字通りかまどのなかなのです。燃えている家でいっぱいです。それが火のついた薪です。それを押し倒してゆくわけにはいかない

い。燃えている家のどれかが倒れてしまうのを待たなければ、かまどの外への道は通じないのです。

ぼくは待つことにしました。

ちょうど宗福寺の本堂が、オレンジの色の炎をあげています。柱と梁が先に燃えたのでしょうか、レントゲン写真の骨のように、そこだけが白金色になつて透けています。その柱と梁が崩れ落ちてしまえば、その上を踏み通つてぬけないこともないだろう。ぼくは見当をつけました。しかし、まだまだ宗福寺の本堂の構築物は身じろぎしてくれないのでした。

ぼくは墓地のなかを、右左に歩きました。馬肉によく似た空を仰ぎました。ぼくの誕生日は五月一日です。満二十六歳になつたばかりです。三月十日の下町の空襲で死んだ高橋哲男より一歳上です。前年の七月二十六日、瀬戸内海で事故死した美学科卒業の海軍少尉・上参郷匡より二歳上です。しかしまあ、似たようなもので、人生二十五年の生涯です。学問も仕事も、皆無に近い。快樂は知らないに等しい。ぼくの場合は、詩が六篇、小説が二篇。大学はまだ終え

ていない。はないものです。だが、何の感傷もない。奇妙にさばさばしているのです。たぶん、これは火のなかで、いわばあぶられているせいではないでしょうか。病床で死に直面するのでしたら、こうはいかないかもしません。ただ、睡氣を払おうと墓地を歩きながら、身寄りと友人に向けて、「それは、ねえ」といいました。「幸福に」とか「元氣で」とか、つけ加えるのは野暮だと信じていました。ぼくの声が向こうへ届くはずはない。それでも、声をかけました。声をかけてから、そうだ、と思いつきました。ぼくだつて詩を書いてきたものはしくれだ、最後に四行詩を一篇、つくり出してやろうじゃないか。どうせ焼けてしまうのだから、文字にしたつて始まらない。ただ、その四行詩を口ずさみながら、火のなかに飛び込む。誰も知らず誰も見ないだけに、これ粹といふものじやないか。

ぼくは析ることをしませんでした。訴えかけることをしませんでした。たとえば神のような人間を超えた存在を信じていなかつたのです。だから、当然だつたのかもしれません。しかし、どうして、死と直面していると思つてゐるそ

のとき、すぐそばにいる生みの母に、話しかけなかつたのでしょうか。同じく死に直面している母の、それまでの思い残してきたことを、そして無念の思い

を、聞いてあげなかつたのでしょうか。慰め合わなかつたのでしょうか。そういう大切なことをせずに、どうして自分一人の四行詩遊びなどにふけろうとしたのでしょうか。今から思えば、まったく情けなくなってしまいます。

ただし、四行詩をつくるうといふ気持ちは、ふざけたものではなくて眞面目でした。四行詩をつくることによつて、自分自身の力のあかしを自分自身に見せて、それを最後のせめてもの慰めとしようとしたのでしょうか。それとも、ひょつとしたら、いないかもしない人間を超えた存在に、いないのを承知のうえで、自分の力のあかしを見せようという奇妙ないじらしさなのでしょうか、それは。

だが、四行詩はできませんでした。どう工夫しても駄目なのです。他人ではない、ぼくの言葉が動き出してくれないのでです。やつと唇をついて洩れてきたのは、その半年前のぼく自身の旧作の一 行詩でした。

### 現よ 明るいわたしの墓よ

だが、これは、なんとその場にふさわしかつたことでしょう。

ついに四行詩が一行もできなくて不満なぼくは、母のいるところに並んで立ちました。宗福寺の本堂の方を見つめました。眠いのをこらえます。でも、うつらうつらします。母も同じではないでしょうか。しかし、どうしようもなく暗いところへ引きずり込まれてゆくのです。限界がきたな、もう、と観念しました。

そのとき、宗福寺の本堂が柱ぐるみ、あかあかとぐわらりと崩れるのが見えました。我慢ができなくなりました。

母の手を握りました。まともに顔を見つめました。赤い目のなかに光るもの、強さをましました。ぼくは、母の乳房から口を離して、それつきり飲むのをやめた幼い日のことをふいに思い出しました。むろん笑つているには程遠いのですが、母の日にそのときと似た合意のしるしをぼくは読みとりました。「行こう」と、ぼくはかすれた声でいました。母は黙つたまま、うなずきま

した。

手をつないで、走りました。文字通り火の海です。しかも、地形で、こぼこと屈折があります。膝ひざをついたり、のびあがつたり、這つたり、かいくぐつたり、します。それでも、走ります。炎えているなかなかのです。走らないわけにいかないのです。

やがて、宗福寺の本堂の残骸を、跳ねるよにして乗りこえて、玄関前に出ます。そこからは一本道です。だが、両側の焼けた家が倒れてきています。炎の一本道です。そこを、ぼくと母は手をつないで走ります。あえ喘ぎながら走ります。息のできない悪夢のなかのよな一本道です。

だが、どうしたのでしようか、握りあつていた掌と掌が、ずるずるずるずる、ぬるぬるとすべりおちてしまうのです。母がつんのめつて倒れるのが、ちらと目に映ります。それでも、走る勢いにのつて、ぼくは走ります。やつと、気づきます。走るのをやめようとします。たたらをふみます。辛うじて、振り返ります。

炎の一本道の上に、母は倒れて、つつぶしています。その顔をもちあげてきます。その右手をあげます。なつみかんの実みたいな顔です。夏蜜柑の枝のような右手です。どちらも炎えています。そして、右手をこちらへ押しやるのです。二度も三度も四度も。「行け、走りぬけなさい、わたしにかまうな」と。

その姿ははつきり、ぼくの目に焼きつきます。だが、ぼくの身体は、その姿をあとにして、そのまま、走り去るのです……。

## 『炎える母』へ走る

しばらくの間ゆるしていてほしい。母の信じていた、

今のはくの信じたがっている、おでんと様に対して。

ぼくの母は、昭和二十年五月二十五日の空襲の夜、炎の一本道の上で死にました。そして、その夜以後、ぼくは生きのびています。

これは、いつたいどういうことなのか。

それを問うのは、ぼくにはひどく苦しいことなのです。できれば、避けたいのです。

母を死なせたのは、ぼくだと思っています。それだけでは足りない。ぼくは母を置き去りにしてきたのだと、考えています。もつときつい言葉のほうが正

確かもしません。ぼくは母を殺したのです……。

罪は、はつきりぼくにあります。

しかし、それについては、あまり語りたくないのです。ぼくの罪は、どうすれば、あがなえるのか。あがないようが、ないのです。本来なら、ぼくも死ぬ、というより殺されるべきです。いや、死んでも殺されても、ぼくの罪はあがなわれるわけはないのです。

それなのに、ぼくは生きてきました。今後もいつまでか、生きてゆこうとしています。

自家撞着です。自己矛盾です。自己欺瞞です。なぜなら、ぼくは自分の罪をあがないたいと念じているのですから。

自分に対して、堪えがたい思いです。

それでいながら、なぜ自分に我慢してきているのか。

せめてぼくにとつては、書くことが辛うじて罪のあがないにつながる、信じるからです。

直截ちょくせきなあがないの道が、ほかにないわけではありません。たとえば、僧侶になること、無償の社会奉仕の仕事などなど。だが、ぼくはそれをえらべません。卑怯ひきやくであるからです。そして、自分に甘いからです。しかし、そうであるにせよ、ぼくは今までの自分を、まるで違う自分に変えることができないのです。

どうか、しばらくの間ゆるしていくほしい、と願っています。何ものに対しても？　いくぶんかは、ぼくの母に対してです。さらに、もういくぶんかは、世間に対しています。そして、ほとんど全部は、母の信じていた、今のぼくの信じたがつていて、おでんと様に対しています。

こういう願いをもたないことには、ぼくは生きてゆくことができません。

ぼくの生きてゆくことの中心は、書くことです。それが、罪のあがないにながると信じるのは、ぼくの書く力は母からもらっているのであって、書けばそこに母がふたたびよみがえってきて、ときにはぼくを叱ったりしてくれるからなのです。

変だとお思いになるむきも、あるかもしれません。しかし、ここでは、そういう母の、しかも母の死後の、ぼくとのつながりを語りたいのです。

アンタサマ イカイオ世話ニナリマシタ 生命ホケンカ  
ケテオキマシタ コレテソウ式シテクダイ ハハヨリ

昭和二十年八月十五日、敗戦の正午の天皇の詔勅のラジオ放送を、妻と子の疎開先の福島市紫内の炎天の路上でぼくは聞きます。

「ああ、終わったのか」

言葉にすればそれだけのことをつぶやいて、しかし、ぼくのこころは単純ではありませんでした。ほつとした、という思いはある。だが、解放感はない。むしろ、沈んでいるのでした。しばらく地面ばかり眺めています。にじみ出でている哀しみの感情に言葉を与えることができないでいるのです。

空を見上げてみました。天は思いきり晴れあがっていました。あわいひすいの色をしています。その奥の高みに、洗いたてのような白い雲が一つ、ひどく

孤独に浮かんでいます。ぼくは、それから目が離せなくなりました。

じーんとなりました。眼頭は決して濡れてこないので。身体のなか全体に、涙のもののようなものがにじみ出でてくるのです。

もう焼夷弾の降つてこない日本の空のこの雲を、母は決して見あげることはないのだと、と思いました。はつきり母はぼくのそばからあちらへ行つてしまつているのだな、と感じました。そのくせ、自分がこちらにいるという自覚がわいてはこないのでした。

すぐ、友だちのことがここに浮かんできました。去年の七月二十五日の瀬戸内海の上参郷屋、今年の三月十日の高橋哲男、二人ともあちらへ行つてしまつているのです。こちらへやつてくることはないのです。それなら、若いままで亡くなつた二人の生とは、いつたい何だったのでしょうか。

ぼくはまた、白い雲を見つめました。上参郷と高橋の二人の生が、ふつとその白い雲そのものだと感じられるのです。犬死にだつたのじゃないかい、とぼくは訊ねかけました。はつきり戦争は負けた。だが、かりに勝つたとする。そ

れでも、どちらにしろ、きみたち、犬死にだつたのじゃないかい？

しかし、このとき、知らずにぼくが母と友だちを区別していたことに、ずっとあとになつて、ぼくは気づきました。

犬死にだつたのでは、などと母のことをぼくは考えはしなかつたのです。そして、母が白い雲だなどと思つたりしなかつたのです。

でも、これは、なぜなのでしょうか。

一つには、年齢差が作用しています。母は数えで五十九歳で、友だちは五十歳の半分で死んでいます。友だちの生だけが未完だつたと、つい思えたのではないでしょうか。しかし、母の生だつて、完結してはいなかつたはずなのです。共通しているのは、無念の死、ということです。だが、それなのに、やはりぼくは友だちの無念のほうを激しく強いものと感じとつていたのではないでしょうか。

母を軽んじていたとは思いません。ただ、母は肉親です。そのこころを身体ぐるみ、たっぷりぼくが受けとつてきているという思い込み、それが母の生を

友だちの生ほど対象化して受けとるのを怠らせていたのではないでしようか。

ぼくの甘えの一つです。

八月十五日正午、高い天を見あげて、あちらとこちらの二つをくつきりぼくは感じとりました。そして、あちらとこちらの意味の違いを、ほとんどぼくは感じとりませんでした。

ただ、ぼくが立つているのは、あちらとこちらの境界線の上だと悟つていました。その境界線を上のほうへ延長した高みに、友だちの白い雲はかかるのでした。そして、その境界線の向こうの一本道の上に、母はまだ倒れていたのでした。

その八月十五日以後、どうなつたのか。

世間には、戦後が始まりました。だが、ぼくには、戦後が始まありませんでした。なぜなら、犬死にしたかもしない友だちと、一本道の上に倒れたまま抱きおこされない母が、ぼくにはいて、ぼくにはまだ戦争が終わつていなかつたのですから。

八月十五日からの日本がどうなつてゆくのか、ほとんどの日本人にわかつていません。

それからのぼくがどうなつてゆくのか、肝腎のぼくにわかつていません。ともかく生きていってみよう、まずそれだけだ、と考えました。呑氣でしようか。しかし、ぼくは天下に志をもつていないのでから、ほかにどうしようもないのです。文学作品を書きたいと思つていたことは確かですが、それでどうしようという気持ちはないのです。

そういうぼくにも、義務があります。稼いで妻子を養わなければならぬのです。そのためには大学を出たほうが便利です。国が敗れたのですから、軍事教練に一回も出席してなくとも卒業できる見込みが生まれました。ただし、必要なのは卒業論文です。ぼくは福島の疎開先で、十日で間にあわせ仕事をでつちあげます。題名は『デカルトの懷疑について』。書きながら、これまでの自分の青春がひどく青臭かつたのも幼い懷疑のためだつたし、自分が戦争を忌避したのもやはり幼い懷疑のためだつたと、知りました。しかし、その懷疑は、

これからぼくが生きてゆくうえで、何の役に立つことか。さむぎむしい思いがしました。

九月三十日、疎開先を引きはらつて出てきていた東京で、卒業証書を手にします。十月一日、同じ大学のフランス文学科の大学院に入学します。卒業も入学も、何の感動もありません。

「亡くなつたお母さんに一目、見てもらいたかつたでしよう、この日のあなたの姿」

妻の母が、そういつてくれます。いたたまれなくなつて、ぼくは別室へ立ちます。たぶん、母は喜んでくれるでしょう。だが、そんなことは、してほしくないのです。五月二十五日の夜の炎の一本道に、つづぶしたままでいてほしいのです。そうでなければ、ぼくの罪が薄らいでしまうではありませんか。

家庭教師の仕事をまた始めました。だが、インフレで物価が急上昇して、生活が苦しくなります。ぼくは闇物資の売買を仕事にしました。アメリカの進駐軍から流れるタバコや食糧を、焼け跡にわらわらとできた飲食店に運んで、悪

くない利益を手にするのです。ただし、法律で禁止されている取引です。発見されれば、処罰されます。

だが、ぼくは肩をそびやかし、ひそかにうそぶいていました。「なあに、構うもんか、何だつてやつてみせるさ、生みの母を炎の海に置き去りにしてきた男じやあないか」

書くのもおぞましい独り言です。ヤクザじみた居直りかた、許せない思いです。やりきれません。

しかし、こういう居直りかたがぼくを支えていたことは事実なのです。すさんでいた、というのとは違います。でも、たけだけしかつた。そして、たけだけしくなくては、生きてゆけないような感じの日々なのでした。

新宿あたりの家畜小屋のような安酒屋では、バクダンという名の強い焼酎しゃうちゅうがよく売っていました。臭くてきつい匂いと味がします。息をつめて、ぐつとあります。喉の奥が焼けるようです。だが、そういう酷たらしさが、逆にほしいのです。そういう時代であり、人々がありました。ぼくの場合は、それに母の片仮名書きの、しかもぼくあての手紙ではありませんか。

母のことがあるのです。嵩だけられないわけにはいかないのです。

ある夜、安酒屋の一軒で、例によつてバクダンを飲んでいました。ふと、何気なしに内懷に手をやると、しわになつた封筒が出てきました。そのとき身につけていたのは、久しぶりにタンスの奥から引き出した古い上着です。いつたい何だらうと思つて封筒から抜いた紙片を見て、ぼくは驚きました。金釘流の母の片仮名書きの、しかもぼくあての手紙ではありませんか。

アンタサマ

イカイオ世話ニナリマシタ

生命ホケンカケテオキマシタ

コレデソウ式シテクダ（サ）イ

草バノカゲヨリイノツテキマス

シワワセニシワワセニ

バツテン

『炎える母』へ走る

昭和十九年十二月一日

千五百円と印刷された母の生命保険証書も折りたたまれて、手紙の間に入っているのです。受取人はぼくで、印鑑もぼくのものです。

でも、母にこんな遺書があつたなんて。ぼくは、うつと、声をのみました。母は自分の意志をおもてにあらわさない人でした。文字を知らないこともあって、およそ手紙など書いたことのない人です。ぼくは一通も貰つたことがありません。それなのに、こんな遺書を書くなんて。しかも生命保険証書まで用意しておくなんて。

ぼくの想像をまったく超えたところで、母は行動していたのでした、いかにも自分流儀に。

母は、よほど思いつめて、こういう措置をとつたに違ひありません。ぼくに相談すれば笑つて止められる、と思ったことでしょう。それに、その生命保険の千五百円は相当に高い額です。戦争が終わるまでの物価だつたら、ぼく一人で二年間、妻子と三人で一年間、たっぷり生きてゆけたお金です。学生のぼくが勉強の時間を大幅にさいて家庭教師で暮らしこそ、千五百円の生活費援助をこつそり申し出でくれたのでしょう。自分の葬式の費用に名目をかりて。

ぼくは息をのみ続けていました。いきなり、母がよみがえってきたのでした。にこにこと機嫌のいいときの笑みをうかべて、目尻に深い皺をよせて、しかしひくが喜んでくれるかどうかをうかがい見るような、どこかおどおどした目付きをして。

しかし、その母に、いつたいぼくはどう対応したらいいというのでしょうか。もう炎の一本道の上に母を置き去りにしてしまつているぼくは……。

ぼくはもう一杯バクダンを注文して、それをじくじくと飲みほす以外のこと

が、できませんでした。

ひどく皮肉なことがあるのです。

昭和二十年の九月以来、物価はすさまじく上昇を続けていました。その八月十五日までならぼくと妻子で一年間は暮らせた千五百円が、その生命保険証書を見つけ出した昭和二十年の十二月では、三ヶ月すごせるかどうか、あやしい金額になっているのです。

もちろん、それでも貴重でした。なにしろ当時は食糧がひどく不足して、雀の涙ほどの配給では誰も生きのびてゆくことができず、高額なお金で闇の物資を手に入れていたのですから。盛り場には浮浪者がぞろぞろ歩き、東京で十人や二十人の行き倒れのない日はなかつた頃なのです。「配給された自由」という言葉が流行しましたが、その自由のなかには餓え死にする自由も含まれているのでした。

生命保険証書で引き出した千五百円のことは誰にも黙つて、ぼくは少しも家計に入れず、アメリカ軍の流すタバコ、俗称洋モクの高級品を買いました。全

部で、わずか五十個です。それをほとんど焼け跡の料理屋に運んでお金にかえ、その代金で毎晩のようにパクダンをあおりました。今なら、そんなすねたような真似はしないでしよう。しかし、その昭和二十年の終わる頃のぼくには、母の愛情はなまなましすぎて、まるで追いすがられているようで、はやく母の期待を裏切つてしまいだかつたのです。

母は遺書のなかで、このお金で自分の葬式を、といつています。しかし、母が亡くなつて三日後、妻の母とその両親の手で、母の葬式は略式でしたが、行なわれたのでした。

ぼくは参列していません。空襲の火のやんだ五月二十六日未明、一本道の上で眠っている母の姿を、ぼくはおがみました。そして、それだけなのです。母の葬式の前日に、切符が手に入つたのを口実に、母の近くから逃げ出すように福島の疎開先に行つたのです。葬式は、こわかつたのです。

ぼくのいない母の葬式の三日あとに、不思議なことが起ります。

母の遺骨のあづけてある宗福寺に、人品のいやしくない中年の婦人が訪ねて

きます。ぼくの母の俗名、古賀松枝の名をあげて、「そのお墓を境内に建てていただきたい、ついてはこれだけの金子をさしあげさせていただきます、たぶん不足はないと存じます」と、かなりの金額をおいて物静かにいつて、帰ってゆきます。

その帰人は古賀家の近しい姻戚に違いないと、住職は考えます。そこで、思えばぼくと母がきびしい時間をすごした墓地の片隅に、質実な古賀松枝の墓を建てます。

のちになつて、その話を住職から聞いた妻の母は、「ほなら、その御婦人は」と探してみます。だが、ぼくの身よりに心当りはないのです。また、ぼくの親しくしている家庭のいくつかにも、それらしい婦人はいないのです。結局、その墓の建立者はどこにも尋ねあたらないのです。じつは、一年たつても二年たつても、そして四十年たつた今でも、それらしい婦人はどこからもいっこうに、見つからぬのです。

これは、どういうことでしようか。どうにも解けない謎なのです。

だが、もう、そうつとしておきたいと考えています。ぼくにも言葉ではいわずに、母の信じていたにきまつておるおでんと様、そんな存在のおめぐみがあの墓であつたと思うことにしたいのです。ぼくが母にむごかつたぶんだけ、母に温かくしてくださる存在があつたのだと信じることは、少なくともぼくにとっては救いなのです。そして、こういう救いを見る嬉しさが、今のぼくを生かしている力の一つなのです。

### 河童体験と、自同律への不信を生みつけた力——人間を超える存在。ぼくは、それを、非人称存在と呼びかえた。

戦後が始まらないぼくを押しつづんで、しかし、世のなかのほうで始まつた戦後はどんどん進んでゆきます。ぼくのところのなかの時間は八月十五日で停止しているにしろ、ぼくのところのとの時間はよどみなく流れていきます。

昭和二十一年五月二十五日、ちょうど母の一周年忌に、ぼくは都立女子専門学校のフランス語の先生の職にあります。これで、飢える自由からは遠のく

」とができます。なぜ、こんな恵まれたポストを、と聞いて、その返事に驚きます。

「遠くから飲み屋でのきみの飲みっぷりを見て、なかなかいさぎよいのに感心したんだよ。学問だけが教師じゃないからね」

ぼくを強く推してくれた数学の寺島信一教授は、こういって笑うのです。母のこととで、ときにもいつめたように、ぼくは飲むことがあるらしく、その飲みっぷりがいさぎよいと映つたのでしょうか。

教師になつてまもなく、第一高等学校の四年ほど先輩の小島信夫、宇佐見英治、矢内原伊作などの諸氏を知り、そのかたがたの同人雑誌『同時代』に入り、また詩と小説を書く興奮を自分のものとします。そして、サルトルやカミュなどのフランスの戦後思想によれて、世界を受けとり直す高揚を自分のものとします。そのうえ、妻子のあるぼくが未婚の女性を好きになり、恋の喜びと苦しみを自分のものとします。

にわかにぼくは、自分の精神と感覚が自己解放を行ないはじめるのを知るの

です。これにはいくぶんの酩酊感があります。ぼくははしゃいでいたのではな  
いでしようか。

ぼくは離婚します。子供はおいてきます。妻に悪いところは少しもない。し  
いていえば、そのことだけが悪いことです。ぼくは自分を改めてむごい人間だ  
と思います。勝手な人間だと感じます。だが、一緒に生活をしていると、どう  
も胸苦しいのです。

ある瞬間、かりにもしも母がぼくの妻だつたら、と空想します。やはり、悪  
いところは少しもない。だが、この場合も、そのことだけが悪いことです、と  
ぼくはいいたくなるのではないでしようか。ひょっとしたら、母がぼくの妻で  
あつても、離婚を申し出たかもしれないのです。ぼくは嫌な男です。だが、こ  
れ以上その嫌なところを見られたくないためには、生活を別にするよりほかな  
いのではないかでしようか。

去つてゆくぼくを、妻は追つてはきませんでした。引き返して、ともいいま  
せんでした。そこが、一本道の上の母と似ていました。それは、ぼくにとつて、

有難いのか、悲しいのか。むしろ、ぞうとしました。もちろん、ぼくの罪の深さに對してなのです。

離婚して一人になつたぼくは、ますます好き勝手なことに身をやつしました。社会変革運動と手をつないだり、かと思うと、パチンコに明け暮れたりもしました。

昭和二十八年四月、法政大学のフランス語の教師になりました。美術評論を書きはじめました。また、新しい恋愛にふけりました。生活の幅がひろがります。また、はしゃぎ続けています。気がつくと四十歳になつています。ついに、そろそろ年貢の納め時だと、決心します。あわてて、それまでの作品を搔きあつめて、生まれて初めての書物を二冊、詩集『黒眼鏡』と評論集『芸術の條件』を上梓してもらいます。そのときになつて、昭和二十年五月二十五日の火にかこまれた墓地での、ぼくが四行詩を作ろうとしていた瞬間のことが、どきどきするほどあざやかによみがえってきます。

二十六歳のぼくは、誰に見せるためでもなく、あとに残すためでもなく、自

分自身へのあかしのために、そしてたぶんいなはずのぼくを超えた存在へのあかしのために、ぼくは四行詩を書こうとしていたのです。ところが、それから十五年たつた今のぼくは、二冊の本を編んで何をしたというのか。あかしとして詩集と評論集をさし出す相手のぼく自身を、そして、たぶんいなはずの、ぼくを超えた存在を、あの瞬間よりもくっきり見つめているといえるのか。

母を置き去りにする前の四行詩を書こうとしていたぼくを純粹というのなら、母を置き去りにして逃げ続けてきた今のぼくは、不純きあまりないのでないでしょうか。

これまであれこれと、しかもホイホイと、生き続けてきたぼく自身を、ぼくは眺め直します。自分では、まあ並みの人間だと思つてきました。しかし、じつはお化けに近いぢやないか。友人たちが肯定できない戦争に堪えしのんと兵隊になつてゆくのに、自分は冷やかに徵兵を忌避する。そのうえ、自分の生みの母を炎の一本道に置き去りにして逃げ出してしまつてゐる。何のための、そんな行動なのか。宗教？ 革命？ ぼくの行動にはつきりした理念などない。

ニヒリズムと自分では思い込んでいて、じつは臆病なエゴイズムがあるだけではないのか。人間の風上におけない。人非人？ そうです、人非人ということは、お化けということです。

このとき、小学四年生のときのぼくの河童体験があらたによみがえってきます。あれ以来、ぼくは父や母などの肉親に奇妙に冷たくなったのでした。父が父であり、母が母である。そういう自同律が信じられなくなってきたからです。父が父でないものであるかもしれない。母が母でないものであるかもしれない。父は父でないものと交換されているのか。母は母でないものと交換されているのか。それならば、別に父や母を大切にするには及ばないではないか。幼い論理だし、感情です。

だが、それにしても、そういう自同律への不信を生みつけてくれた力は、いつたい何であり、どこからきたのでしょうか。

二冊の書物が上梓された四十一歳になつて、やつとそのことをぼくは自分に訊ねました。そして、その力を、人間を超える存在、と考えることにしました。

神さまのようなものです。だが、ぼくは宗教をもたない。だから、その人間を超える存在を、非人称存在と呼びかえることにしました。

小学四年生のぼくに知識はありません。また、それ以後の大学などを卒業したぼくにも、不勉強だから、知識はないにひとしい。だが、非人称存在はぼくの認識を動かし、行動を左右してきた基本だったのではないでしようか。極端にいえば、ぼくに微兵忌避をさせ、母を置き去りにさせ、しかもそのあと浮かれた生活をさせてきた中心の方は、その非人称存在ではなかつたとはいえない。それなら、ぼくを人非人、お化けにした肝腎な元兎（？）は、ほかならずその非人称存在ということになります。

そうだとすれば、お化けであるぼくを解体して腑分けしてみれば、そこに非人称存在の力の働きようを見てとることができるかもしれないのです。

ぼくは河童を材料にして、いくつもの詩を書くことを始めました。ところが、ぼくの河童は世間の通念とずれていて、こんなものなのです。

河童　目はタカ　嘴はカラス　手足はカエル　甲羅はスッポン　頭の皿

## は人間の胎児 各部分 すべて既製品 その合成品

つまり、河童の各部分は既製品のタカやカラスやカエルや人間のどこかを引きちぎつてこれらたものであり、それらは死んでいるはずなのですが、それが集められると、一匹の河童となつて動き出すのです。河童は被害者の合成品です。しかも、河童は人間の生き肝を引きぬくのですから、加害者です。そのうえ、河童のおどろおどろしい恐ろしさは、河童を合成した基本の加害者、これをぼくは非人称存在だと思うのですが、その加害者の残酷の、いわば刻印なのです。しかも、その刻印が疼くために、河童は逆にまた人間におそいかかって加害者とならないわけにはいかない。したがつて、河童とはまたぼく自身の自画像のつもりでもあるのです。

昭和三十九年の東京オリンピックの少し前、詩集『河童』が上梓されました。翌年の昭和四十年七月上旬、ぼくは生まれて初めてのフランスの地をふみ、昭和四十一年四月中旬までの十か月、いわゆる海外研修を行ないます。戦争が終わるまではフランスへ行きたいと思っていました。国外へ脱出したかつたので

す。しかし、戦争が終わつてからは、フランスなどどうでもよかつたのです。ただ、ぼくはフランス語の教師です。実地に出むいての勉強は義務なのです。面倒だなあ、というのが実感でした。

でも、世界の恋人のパリに代表されるフランスが面白くないわけはありません。なにしろ異文化の花が咲き乱れています。見るもの聞くものの、すべてから衝撃を受けるのです。だが、やはり落ち着かないのです。自分が美しい絵葉書の城のなかを歩いているにすぎない通行人だということがわかつてきます。しかし、通行して、どこへ？　ぼくの落ち着けるところは、必ずしも日本でもないのだ、と感じはじめます。

秋のある日、ノートルダム寺院に近いカツフエにすわつて、タバコを吸おうとライターを摺つて、おや、と思ひます。赤いライターの火が熱いのです。そして、こわいのです。久しぶりの体験だ、と悟ります。

あの五月二十五日の夜のあと、じつはぼくは炎という炎におびえるようになつていたのでした。ガスコンロ、マッチ、炭火、それらのそばへ行くと、びく

つとするのです。そつとなるのです。あの夜の一本道の炎が、そこからぼくに吹きつけてくるのではないでしようか。

ところが、いつかそのおびえが間遠になつていきました。とくに『河童』の詩篇を書きはじめてからは、もう炎に平気になつていました。自然に対症療法が行なわれていたのでしょうか。

だが、パリのカッフェで、またおびえが起こつたのです。カッフェで起こつたことは、自分の部屋でも公園のベンチの上でも、つまづきに起こります。ぼくはいやおうなく、あの五月二十五日の夜の現場に連れ戻されてゆきます。あらためて、母に、ぼく自身に、立ち向かいます。そして、立ち向かうためには、ペンをとらなければならないのです。

「うして、詩らしいものが生まれます。しかし、光の都のただなかにいて、ぼくの暗い闇を書かなければならぬなんて。

その作業は、日本に帰つて、続きます。昭和四十一年、のめりこんでできあがつたものが、『炎える母』という題の詩集となつて上梓されます。母が亡く

なつて、二十二年がたつています。

ぼくはいつたい、この詩集を書くことによつて何をしたのか。母の鎮魂などではありません。それは、母を置き去りにしたぼくにできるわけはありません。ぼくの罪のあがないなどでもありません。それは、現実に何の処罰も自分に与えていないぼくにできるわけはありません。

では、何を？　ぼくという人間の罪というものの腑分けのいくぶんかを行なつたにすぎないのではないか。

ぼくはひどく暗い思いに沈みます。空しいことをしたにすぎない。ただ、自分は今、人生の折り返し点に立つてゐるのだなあ、と感じます。

でも、折り返してどこへ行けるのでしょうか。もともとの出発点？　でも、それはぼくにとって、どこの何なのでしょうか。

「走っている」の言葉をつむぎ出しながら、ぼくはあの夜の火の海の現場に、新しく身をおいたのでした。

『炎える母』は、読んで下さったかたがたから、じつに暖かい受けとられたれかたをしました。思いがけないことでした。ぼくの母の哀しみがこもつていたためだと思います。

しかし、ある評論家から強い指摘を受けました。

「ここにはあなたのお母さんの半身像しか描かれていない。全身像が出ていないではありませんか」

そうなのか、やはり、とぼくは思いました。甘やかされて育つたためもあって、その母の甘やかしてくれる半面しか、ぼくは知らなかつたのです。それに、母はいつも黙つていて、他人のことはむろん、自分のことはとくに、語りはしなかつたのです。もともと数の少なかつた母の写真が、空襲によつて焼けて、一枚も残つていなきことは、偶然とはいながら、ずいぶん暗示に富んでいる

のです。

ぼくのほうを見ている母しか、ぼくは見ていませんでした。例外は、ずいぶん少ないのです。

年齢が二十歳離れていた夫婦だつたからでしようか、それとも父のモラルに儒教の影響が深くしみ込んでいたからでしようか、ぼくの両親は人前で、夫婦の狎<sup>な</sup>れ狎<sup>な</sup>れしさも、官能の匂いも感じさせることがありませんでした。伯父と姪という感じでした。

ぼくは小学四年生の河童体験をもつまで、風呂には裸の母に抱きかかえられていられていきました。当然、乳房はむろんのこと、そのほかの女性らしいところにも、ぼくの身体はふれます。それでも、ごく淡い官能しか感じはしないのです。

十五年戦争が次第に進んで、ぼくが中学の三年になつた頃、ぼくの家の商売に少しばかり余裕ができるのでしょうか、ぼくの母は近所の人々と花札をひくことを覚えました。遊びというものを一切知らなかつたはずの母には珍しいことで

す。ときたま、ぼくがその場をのぞくことがあります。母は手放しの嬉しそうな顔をしています。ぼくの見たこともない姿です。だが、ぼくに気づくと、母はすっと表情を引っこめてしまうのです。悪いことをした気になつて、たちまちぼくは退出します。

つまり、女としての母を、人間としての母を、まずぼくは知らないのです。また知ろうともしなかつたのです。

ただ、母の性格は弱いほうではなかつたのだろうと思ひます。こういうことがあるからです。

母の長兄の寅八さんが、娘を芸者の下地つ子にさせてのち、そのお金を母にあづけたのでしょうか、ぼくの家に同居することになります。そこひの日は年ごとに悪くなり、失明に近くなります。もともとが道楽者で働く氣のない寅八伯父さんは、もう何もしなくなり、毎日膝をかかえて部屋のなかでゴロゴロしているだけの暮らしを送ります。

働き者の母には、ずいぶんにがにがしかつたようです。「あん、さんの仕事

を覚えて働きに出なさい、娘を食いものにして恥ずかしくはなかね?」と、何度も叱りつけるようにして、はげまします。だが、「うん、あした」などといつて、寅八伯父さんはとうとう腰をあげません。一ヶ月足らずで、母はもう諦めたようです。ぴたりと口を開かなくなります。あとは、三度三度の食事を運んであげるだけとなりました。

しばらくたつて、兄と結婚して兄嫁が同居します。まだ、成長して一人前の芸者になつた寅八伯父さんの娘、ぼくの従妹が遊びにきます。そしてその二人の若い女性が中学上級生のぼくにいう言葉は同じでした。「あなたのお母さん、こわいよ、アタマがよくて」

しかし、こういう母が酷薄だつたとは、ぼくには思えないのです。ただ、物事の道理というものが、よくわかつていたのだと考えます。寅八伯父さんの生きかたは、母の信じているかもしれないおでんと様に申しわけがたたないと、母には思えたのだと、ぼくは考ることにしています。

母には、子供のうちでは、兄よりぼくのほうが親しみにくかつたと思えます。

ぼくには、母のおでんと様とは異質の近代の道理というものがあつたのですから。小学校だけで上の学校へあがらなかつた兄は、教養はありますが、母と同じ庶民です。それだけに、お互に何かと心が近しかつたのではないでしょか。

母が亡くなつて半年たつて、兵隊だつた兄がビルマから復員して帰つてきました。事情を聞くとすぐ、ぼくを案内させて兄は宗福寺に駆けつけます。住職に強要して、母の墓をあけさせます。墓石のとられるのももどかしく、兄は墓のなかに身をのりいれて、母の骨にとりすがります。もうぼくは背を向けています。すると、兄の号泣しながらの叫び声がほとばしり出るではありませんか。「オツカサン、オツカサン、ムゴカコトナツテシマツテ、オレガイナカツタバツカリニ、オツカサン」

走り去つてしまいたいをおさえて、その場でぼくはふらふらしていました。

『炎える母』の刊行後、十年以上の年月がたつてから、その詩集のなかの別々

の作品が、三善晃さんと萩久保和明さんによつて作曲され、演奏されました。いずれも、ぼくには思いもかけないことでした。それぞれの会場で身をすくませているぼくの、目頭にではなくて身体のなかに涙が、じーんとしみわたつてゆきました。

まず、三善さんの作曲して下さつた「祈り」のなかの一編だけを書きます。

### 祈り(A)

母よあなたのなかに父がはじめて  
はいつていつたその刹那の熱さで最後の瞬間に  
めくらとなつて白い闇にくるめきもがくわたしが  
喘ぎながらあなたの炎のなかに呑まれていつてしまつことを

舞台の上から音楽に昇華してひびいてくるぼく自身のこれらの言葉を聞きな

赤い釘みたいなわたしが  
走つている  
走つている  
一本道の炎が  
走つているから走つている  
走りやまないから走つている  
わたし  
走つているから走りやまないでいる  
走つている  
とまつていられないから走つている  
わたしの走るしたを  
わたしの走るさきを  
焼きながら  
燃やしながら

走つている

走つている  
火の海のなかに炎の一本道が  
突堤のようにのめりでて  
走つている  
その一本道の炎のうえを

がら、「兄よ、許して下さい、決してあなたと母の愛の奪いあいをする」との  
できないほくの、これがせめてもの母への讃歌なのです、許して、そしておさ  
げすみ下さい」と、口のなかでつぶやいていました。

次に、萩久保和明さんの作曲して下さったもののなかから、「走つている」  
を書きます。これは長いものです。

走っている走っている

15

元・後醍醐天皇

走つてゐるもの追い

走っているものを突きぬけて

走つてゐるもののが走つてゐる

走っている

走つて

18

卷之三

レナモ

レ  
ナ  
レ

走っていたものは

走ってない

走つてゐるもののは

- 7 -

走つて

元

レ  
ル  
セ  
ル  
ル

走り下り

11

走三

いたものが

走  
つ  
て  
い  
な  
い

い  
な  
い

いるもののが

いな  
い

母よ

いな  
い

母がいな  
い

走つて  
いる走つ  
ていた走つ  
て  
いる

母がいな  
い

母よ

走つて  
いる

わた  
し

母よ

走つて  
いる

わたしは  
走つて  
いる

走つて  
いないで

いること  
ができるな  
い

ずるず  
るずる

すりぬ  
けることからす  
りぬけてずりお  
ちてすべりさつて

いつたもの  
は

あれは

すりぬ  
けることからす  
りぬけてずりお  
ちてすべりさつて

すべりさ  
ることからす  
べりさつて

『炎える母』へ走る

いつたあの熱いものは

ぬるぬるとぬるぬるとひたすらぬるぬるとしていた

あれは

わたしの掌のなかの母の掌なのかな  
母の掌のなかのわたしの掌なのかな

走つていてる

あれは

なにものなのかな

なにもの掌のなかのなにものなのかな

走つていてる

ふりむいている

走つていてる  
ふりむいている

走つていてる

たらをふんでいる

赤い鉄板の上で跳ねていてる

跳ねながらうしろをふりむいている

母よ

あなたは

炎の一本道の上

つつぶして倒れている

夏蜜柑のような顔を

もちあげてくる

枯れた夏蜜柑の枝のような右手を

かざしてくる

その右手をわたしへむかって

押しだしてくる

突きだしてくる

わたしよ

わたしは赤い鉄板の上で跳ねている

一本の赤い釘となつて跳ねている

跳ねながらすでに

走っている

跳ねている走っている

走っている跳ねている

一本道の炎の上

母よ

あなたは

つづぶして倒れでいる

夏蜜柑のよくな顔を

炎えている

枯れた夏蜜柑の枝のよくな右手を

炎えている

もはや

炎えている

炎の一本道

走っている

とまつていられないから走っている  
跳ねていて走っている跳ねていて

わたしの走るしたを

わたしの走るさきを

燃やしながら

焼  
き  
な  
か  
ら

走つてひる跳ねてひる

走つて いるもの を 突き

走つてゐるものを追いぬいて

元・一の丸

母上

走つてゐる

母よ

炎えている一本道

四  
上

いつたん吸い込まれたすえに、声という名の音楽となつて新しく生まれかえつてゐるこの作品を、演奏会場で聞きながら、「ああ、非人称存在といふもののが、きらめき出でてゐるな、悲しみを光のようなものに変質させながら、萩久保さんの感受性を通りぬけながら」と、感じ直しました。

この「走っている」の言葉をつむぎ出しながら、ぼくはあの夜の炎の海の現場に、新しく身をおいたのでした。あの一本道の上での時間のなかにまた帰つたのでした。ですから、書いている現在と書かれている過去との間に、距離はないのです。したがつて、書きながら「走っていた」などという過去形は出てこないのです。

だが、「走っている」——その主語は、何なのでしょうか。はじめのうち、

ぼくにとつて、それは「わたし」でした。だが、いつのまにか、それは「母」になつていました。かと思うとまた、それは「わたし」でも「母」でもない別のもの、「時間」とか「運命」とか名づけることもできる何かあるものです。それは、人間くさくも生物めいてもないのです。やむをえず、それを「非人称存在」と呼ぶことにします。すると、この作品のなかで「走っている」のは、「わたし」でもあり、「母」でもあり、「非人称存在」もある。三者が一体になることもあります。それだけに、この奇妙な主語には眞実性があると思えてなりません。

書く前からたくさんで、そうしたのではありません。書くうちに自然にそうなつてしまつたのです。それだけに、この奇妙な主語には眞実性があると思えてなりません。

ただし、はつきりとそう感じだしたのは、『炎える母』の上梓から数年たつてからのことです。嬉しい気持ちになりました。なぜなら、その非人称存在とは、母の信じていたはずのおてんと様と、そう違わないはずのものだからです。そして、その「走っている」主語が、「非人称存在」になつたり、「ぼく」になつたり、「母」になつたり、あるいは合体したり、そうすることに、喜ばしい感情を味わいました。なぜなら、そういう体験を、母の生前のぼくは味わうことがなかつたからです。

母は死にました。死んで長い時間がたちました。しかし、音楽家の力をかりたり、非人称存在の力によつたりしながら、なおぼくに功德ともいえるものを与えることをやめないのでいた。

## 不幸と幸福

母も友だちも縄文人も、その沈黙の向こうの何かをくるめき出させようと/orしてい。ぼくのベンはそれを追う。

『炎える母』を書くということは、ぼくにとっては、ぼくに置き去りにされた母のいる一本道の現場と、それから二十二年たった当時のぼくの生活の現場との、その二つの現場を往つては帰り、帰つては往く往復運動をくり返すことでした。

だが、そのうち、気づきます。このぼくの往復運動の伴走をしている存在がいるではありませんか。戦争で死んでしまっているぼくの友だちです。

第一高等学校の同窓生たちの消息がはつきりしてきています。瀬戸内海で事

故死した上参郷匡と三月十日の下町の空襲で戦災死した高橋哲男のほかに、峰岸啓三がレイテ島で、長谷川幸二が北京郊外で、空しくなっています。みんな兄弟のようなぼくの友人たちです。その連中が伴走しているのです。

ぼくの往復運動は、時によつてつらいものです。炎の一木道の現場のほうへ駆けつけていくのは、おこたりたくなります。すると、かたわらで走っている友だちが、こんなことをいうのです。

「そうかなあ、走つていかないの？」あの現場にきみが身をおけば、それだけできみのお母さん、いくぶん気持ちが休まるんだがねえ」

その言葉を聞いて、やつとぼくは、ようやくまた走りはじめるのです。

『炎える母』を書き終えてから、数年の歳月が流れます。書き終えたものが上梓されたからといって、ぼくの往復運動が止むわけはありません。したがつて、ぼくの友だちの伴走もまた止みません。今度は、ぼくは友だちの死の現場と今のはくの暮らしている生の現場との間の往復運動を始めようとします。友だちの死の現場とは、戦地や事故の場所を意味しません。戦時に生を断念したこ

ころの現場なのです。だが、もう二十数年のへだたりがあります。肉親も少なくなっています。友だちの残した手紙や書きものも、ほとんど見つかりません。これが現場だと確認するには、いくら生前の友だちと親しかつたぼくにも、もう一つ何かのきめ手にかけるうらみがあるのです。

しかし、偶然がぼくに恵みを与えてくれました。

「こんなに非日常的で激烈に凄じい芸術が世界にまたとあろうか」

昭和二十五年に発表された岡本太郎さんの『縄文芸術論』と縄文の土器土偶に、ぼくはきびしく述べられます。以後、博物館に通います。次第にのめりこんでいて、古美術商で縄文の作品を買ひはじめます。

ある夜、一つのことを発見して、思わず声をあげました。

日本に土着の縄文人は、ほぼ紀元前三百年に、大陸渡来の弥生人によつて支配されます。以来二千三百年間、岡本太郎さんの出現まで、一人として縄文人の残した作品に感動した日本人はいません。完全に歴史の底に埋められたのです。縄文人と現代は、深く断絶しています。

いっぽう、日の丸の旗で送られて戦死したぼくの親しい友だちは、平和の旗のはためく現代と、深く断絶しています。大死にだつたかどうかさえ、はつきりしていないのですから。

縄文と現代の時間の距離は二十世紀を超えます。ぼくの友だちと現代の時間の距離は半世紀にみちません。だが、双方現代とのこの、この断絶の深さは同じです。そして、どちらもともに、無念の死なのです。そのことを何よりもよく告げているのは、縄文の亀ヶ岡式の遮光器土偶、生きながら死に、死にながら生きて、大きく開けながら閉じているとしか思えないサングラスみたいな目をもつ遮光器土偶、なのです。

こういう発見をして思わず声をあげて以来、戦死した友だちを思えば縄文が浮かびあがり、縄文人を思えば戦死した友だちがよみがえることになります。

もはや両者を区別できるとは思えないまでに、ぼくの気持ちは進んでしまいます。言葉をかえれば、戦死したぼくの友だちの生の現場を作り出す強力なよすがが、縄文の土器土偶にほかならないと思えてならなくなつたのです。

そこで、それをたよりに、ぼくは二者で一者であるぼくの友だちと縄文人の現場との往復運動を始めます。そして文字に書きとめます。ぼくの詩ができてゆきます。そして、やがて、なるほど、ぼくはこういうところへ出てきてしまつたのか、と思い知りました。

ぼくがペンを進めようとするとき、そのペンの先にいるのは、母と友だちと縄文人です。母はろくに小学校へ通わせてもらつてないので、文字は知らないに近い。言葉も多くを吐きません。友だちは大学に学んでいますが、その書き残したものは皆無に等しい。ぼくに語ってくれた言葉で忘れられないものは多くない。縄文人は文字をもしません。残つているものは土器土偶などの造形作品だけです。母も友だちも縄文人も、およそみんな沈黙しているといつていいます。しかし、その沈黙の向こうの何かをくるめき出させようとしているのです。ぼくのペンはそれを追い求めて動いてゆきます。

これは、なかなか生易しくない。どうにもうまくいきません。

ただ、それでもこの仕事から逃げないと、それまでになかつたことが、

ぼくの生活のなかに起ります。

世界のすべての存在は、物質であるだけでなく、タマシイの物質化したもの。実用品であるだけでなく芸術品でもある。

まず、ぼくはいわばインコ病にかかりました。

ぼくは小学生のときには、犬と猫を家のなかにおいて暮らしていました。だが、それ以来は、ペットといわれるものとは無縁でした。ところが、身近に生きものをおきたくなつたのです。それで、小さなセキセイインコにお出で願うことになりました。家のなかで自由に飛んで暮らしてもらいます。ときおり、インコとぼくはインコ語と人語をまじえて語りあう。

このインコは、自然の子供です。つきあつていると、ぼくのなかの自然の子供がよみがえってきます。そこで、籠に入つたインコと連れ立つて、屋外に出ます。ぼくの住居のすぐ前には江戸川が流れています。見渡す限りの長い土手と広い河川敷が連なっています。そこを散歩するのです。すると、季節によつて、

ヒバリ、セキレイ、ヒヨドリ、カモメ、カモなどが現れて、飛びかわしたり鳴きあつたりします。それらをぼんやり眺めながら、ぼくとインコはいつぱいに陽の光を浴びて、往つたり来たりするのです。

小林秀雄さんは、その母親を亡くしたあとのことと話をっています。

「庭先で雀が鳴いている。ああ、おつかさんがやつてきているな、と思う」

小林さんは雀がおつかさんに見えたのでしょうか。それとも、そのあたりにおつかさんが現れたので、それで雀が鳴いていると感じられたのでしょうか。いずれにせよ、こういう言葉の吐ける人の、その母親との交感はしみじみと深いのです。強い母子のこころの流れあいに、ぼくは打たれます。  
ぼくの場合、江戸川のほとりに鳥たちのやつて来ているのを見ても、母が来ているな、とは思いません。ぼくのマンションの住居で母とともに暮らしたという体験がないことも、その理由の一つかもしれないのです。早くから鎌倉に家庭をもつて定住した小林さんと違つて、ぼくは戦争が終わつて四十年間で、二十回も住居を変えているのです。

しかし、それだけに、今となって母のひそかな嘆きがわかる思いもあります。生まれ故郷の熊本県の菊池市の農家を少女の頃に出て以来、ぼくの知るだけでも長崎、北九州、宮崎、東京と、ひどくかけ離れた土地に移り住んできた母です。古い日本の家族制度のなかの女性には、「女、三界に家なし」という悲しみがありました。ましてぼくの母は、と感じないわけにはいきません。

思い出すことがあります。昭和二十年四月の終わり、妻子の福島の疎開先に、ぼくは母を送つていきました。そして、わずかな暇をぬすんで、福島からすぐの飯坂温泉へ泊まりにゆきました。戦争中で旅館はさびれていますが、温泉はゆたかにあふれています。すると、春のおだやかな陽の光がたっぷり射し込んだ明るい湯船で手足をのばした母が、こんな独り言をつぶやいたのです。

「ああ、いいお風呂、極楽じやねえ。何十年ぶりで温泉につかつたんじやろか。

ほんとに、よか気持ちたい。有難かねえ」

長年の労働で陽焼けした顔と手先をのぞかせて、湯のなかでゆらめいている母の身体は、じつに久しぶりにぼくが目にする身体は、瘦せてはいるものの、

はつとするほど白いのでした。

江戸川が陽の光をきらめかして流れているのを見ると、ときどきこの母の姿と言葉が浮かんできます。ああ、と溜め息をぼくはつくのです。そして、あのときだけだつたなあ、生涯でただ一度母に喜んでもらえたことをぼくがしたのは、と思うのです。

ぼくがインコ病にかかつて以来、うつかりして二度ほど住居の外にインコに飛び出されてしまわれたことがあります。インコは決して帰つてこないので、目で追つても、たちまち視野からはずれて、もう姿を見せないので。小さなインコは、自然のなかで餌をあさることができず、野鳥化することはないので、いつたいどこで空しくなるのでしょうか。

次のような話を何かの本で読んだ、と伝えてくれた友人がいます。

「ある鳥は、いつたん籠の外に出ると、まつすぐ大空の高みへ向かつて飛ぶ。どうまでもいつまでも飛ぶ。そうして姿が見えなくなってしまう」

その友人に向かつて、ぼくは訊きました。

「どういう鳥なの？」

すると、友人は答えました。

「そんなこと、知る必要はない」

話は、友人のファイクションかもしません。

しかし、その「ある鳥」を、ぼくはいなくなつたインコだと思つてしまふのです。そのインコのことを考えていると次第に、大空の深みに浮かぶ雲が、戦争でなくなつたぼくの親しい友だちに見えてくることがあります。

雲は雲であつて、雲以外のものではない。そういう意見のあることを知っています。だが、そういう切つてしまえるでしょうか。

徳利を例にしてみます。これは、まず実用品です。酒をいれて、燭なべをして、盃わにそそぐ道具です。しかし、それだけではない。徳利の形と色と艶つや、一口に姿、これはじつにさまざまです。そこに天空を感じるものもあり、大地を思われるものもある。だからこそ、酒など飲めなくて、徳利を手離せない人もいるのです。つまり、徳利は実用品であるとともに、芸術品です。そして、徳利

は物質であるとともに、物質を超えたものです。タマシイの物質化したものともいえます。

この徳利の作り手は、人間だけではありません。自然のなかにある土と水が素材になり、窯かまどのなかの火や空氣が焼きあげます。人間以外の力が加わつて働いています。それを、非人称存在の力、と名づけておきます。

徳利は、こうです。それなら、大空に浮かぶ雲は、どうか。これも、物質です。だが、物質であるとともに、やはり物質を超えたものです。タマシイの物質化したものともいえます。ただし、このタマシイは人間のものではない。自然のものです。徳利を形成するに役立つた土と水と火と空氣などのもつ力には等しいものが、この雲を生んだタマシイです。したがつて、雲を実用品と名づけることはできなくとも、雲を芸術品と呼ぶことはできるのです。

ぼくの散歩する江戸川のほとりでは、夕焼けがじつにみごとです。ぼくの住んでいる市川市側の土手のはるか向こう、対岸の小岩の背後、左手は富士山に始まつて真向いの秩父山峰に連なつて、右手は男体山におよぶゆるやかでくつ

きりした稜線の上に、大空いつぱいの雄大な夕焼けが立つのです。それは時に  
より、茜色に、またいちじく色にあるいはざくろ色に、さらには黄金の色に、  
そして場合によつてはそれらを複雑に混ぜあわした色に、さまざまに色と光の  
豪華な交響曲をくりひろげます。すっかりぼくは魅入られてしまいます。

この大スペクタクルの前にいると、ぼくは縄文人とその作品、一口に縄文を  
そこに感じてしまします。とくに、激烈に動的な中期の華麗な火焰土器と、晚期  
の亀ヶ岡式の沈鬱に静的な怪異な土器土偶を。すると、その縄文に引きずら  
れて、戦争で死んだぼくの友だちとぼくの母とが、そこに重なつて立ちあらわ  
れています。さかんに焰を噴きあげているぼろびそのもの、それが夕焼けだと  
思えてくるせいなのでしょうか。

この夕焼け、これも自然現象であつて、雲と同じく物質です。しかし、雲と  
同じく芸術品です。そして、これをつくるのは、やはり非人称存在の働きです。

昔の日本では、地震を起こすのは大ナマズ、雨をふらすのは八大魔王、雷を  
落とすのは雷さま、などと考えられていました。そういう大ナマズや八大魔王

や雷さまなどの総称が、非人称存在です。わたしという第一人称や、あなたとい  
う第二人称や、かれという第三人称では呼べず、つまり人間を超えていて、  
しかも人間も含めての自然のさまざまな現象をつくり出して支配していると思  
うほかはない存在、これを非人称存在というのです。

この非人称存在の働きは、たいへんさまざまです。地球そのものを、さらに  
は宇宙そのものを、ひよつとしたら人間そのものをも、つくつたと思つてもい  
い。まあ、万能です。それなら、人間のタマシイをもつくつたと見なしてもい  
い。じつにあれこのものをつくつているうちに、きわめて長い時間の間に、  
非人称存在は人間のタマシイに似たほかのものをもつくつたと考えられなくは  
ないのです。その人間のタマシイに似たものが、たまたま雲だつたり夕焼けだ  
つたりすることもありうるのではないでしようか。

山水草木のすべてに神や仏が宿つているとまでは、ぼくは考えていません。  
宗教を信じるに至つていません。ただ、世界のすべての存在は、單なる物質で  
あるだけでなく物質を超えたものでもあり、タマシイの物質化したものでもあ

ると、受けとっています。単なる実用品であるだけでなく芸術品でもあると、見ています。汎論者でなくして、ぼくは汎論者ということになります。

戦争がすんで二十二年たつて『炎える母』を書いた頃から、ぼくは次第にこんな汎論者になつてきました。そして、それは炎の一本道につづぶしている母の現場とぼくの暮らしとの間の往復運動を始めたためのように思えてなりません。母の現場、そして亡くなつた母、それが単なる物質の力しかもたないはずはなかつたからです。この世にいなくなつたからといって、もう母がぼくに語りかけなくなつたわけはなかつたからです。

母は文字を使いません。言葉もあまり吐きません。沈黙の母です。その沈黙は文字以前であり、文字以外です。だが、だからこそ、かえつて多くの力を秘めてもいるのです。

行け、走り去れ、生のほうへ、お前の生の  
ほうへと、いつまでも母は叫びやまない。

ぼくが汎論者になつて以来、二十年近い年月が流れています。それ以後のぼくの生活は、おのずからそれ以前の生活と違つてきます。一番大きな変化は、恩人といつていい友人がにわかにふえてきたということです。

多くのかたがたのなかから三名だけ例をあげます。ぼくの作品を一つの契機として作品をつくり出された作曲家の三善晃さんと萩久保和明さんのお二人は、それまでぼくのうとかつた音楽の素晴らしさへぼくを導いて下さいました。また、宮城県中新田町の町歌の作詞をぼくが、作曲を三善晃さんが受けもつたことを通してお知りあいになつた本間俊太郎町長は、蛙の鳴く水田のまんなかに世界でも有数の音響効果をもつバッハホールをつくって、人間の夢の具現の闘いの美しさをぼくに教えて下さいました。さらにまた、偶然からおつきあいを始めた船橋市の魚屋さんの古屋善興さんは、たいへん美味しいのにこの上なく

安い魚はありえないはずなのに、みごとにそれを売り続けて、人間の知慧と努力の奇蹟の不思議をぼくに見せて下さいました。そしてさらに、これまた偶然におつきあいを始めた画家の小野忠弘さんは、無私になつて宇宙光線に刺し貫れた感受性のドラマそのものをカンバスにたたきつける作業を示して、人間を超えようとする人間の営みの畏ろしさをぼくに示して下さいました。

いざれのかたの仕事も、文字以前と文字以外の領域にあるものに迫る作業です。その営為のなかから凄まじい非人称存在の力が噴き出しています。そのことによつて、ぼくは動かされます。そのことによつて、ぼくの世界は新しくされたり深められたりします。ですから、恩人に近いのです。しかも、このかたがたは、しばしばぼくと日常の行動をともにして下さるのです。

こういうかたがたが、ずいぶんふえてきました。そして、こういうかたがたは、『炎える母』を読んで下さつていて、ぼくの母の文字以前と文字以外をありありと感じとつておいでになるのです。そのためにはぼくの友人になつて下さつてているともいえるのです。

自然や芸術や人事の何かに、しばしばぼくは感動することがあります。そんなとき、ぼくに強い変化の起こつているのを覚えるのです。ぼくのなかの何かが、感じて動いているのを知るのです。そして、ぼくのなかをのぞきこむまでもなく、ぼくは悟るのです。感じて動いているのは、ぼくの死者、戦争で空しくなつた母と友だちと縄文人であることを。それとともに、ぼくの生者、恩人ともいえる生きている友だちであることを。

茶道に、「一座建立」という言葉があります。戦国の名たちが戦争と政治の日常の現実のなかで、しかもその現実を離れて、世界の本然の姿に、宇宙の真実に、参入しようとして、茶席という孤絶した場を設けることです。ぼくが感動するとき、ぼくの死者と生者たちと、一座建立を行なつてゐる思いがします。

こうして、ぼくは生きてきました。生きてゆくでしょう。

ぼくの母は、ぼくを産んで不幸でした。しかし、その母から生まれて、ぼくは幸福だと思うのです。炎の一本道の上で、母は顔をあげ、右手をかざして、

三度四度ぼくを押しやりました。黙つたままです。でも、よくわかるのです。

「行け、走り去れ、生のほうへ、お前の生のほうへ」と叫んでいるのです。ぼくは、その母の右手に、沈黙の言葉に押しやられて、この世に生き続いているように思うのです。

母の生涯は沈黙の生涯でした。だが、その沈黙は語りかけてくるのです。ですから、ぼくはそれにうながされて、言葉を書き連ねてきました。それは、いま書き終わろうとするこの文章だけのことではありません。これまでの、そしてこれからすべての文章の奥に、母がいるといっていいのです。母の沈黙がぼくを語らせるのです。ぼくは自分を幸福だと思わなければなりません。

## あとがき

わたしの母は、たいへん地味で、ひどく質素で、きわめて平凡でした。いつも日陰で生きていました。苦のようないい人でした。

だから、花など一片もつけない今まで、この世を去っていきました。

この母を語ることは、わたしには非常に難しいことなのです。およそ伝記のもととなる逸話など何一つ無いのです。客觀化などできる材料がないのです。おそらく単純な生涯です。

ただ、母にとって大きな不幸が一つありました。それは、ぼくという子供をもつたことです。ぼくというものによつて、母という苦は、その生涯の最後において、ふみにじられたのですから。

そういう非人間の残酷をおかした子供であるぼくの、本書は親不孝の罪の記

録です。

ただし、ぼくの自伝ではないのです。自伝に似た文章によつてしか、ぼくの母の肖像は描けないのです。

本書を書くことは、改めて自分を告発する」とでした。おぞましい限りでした。

それでもなお、本書を書いたのは、平和で幸せな現在の日本にも、ぼくに似た親不幸な子供をもつた母親がおいでになるかも知れないと思つたからです。

時代と社会は違つても、母と子の愛と悲しみの基本はあまり違わないのではないか。

生前に友だちをもてなかつたぼくの母が、本書によつてせめて一人の友だちをもつたがいいが、ぼくの喜び、これには笑ひはないのです。

昭和六十一年三月

左近

「デキュメント・わが母

昭和六十一年四月十七日 初版発行

著者——宗 左近  
发行人——赤尾一夫  
編集人——中山行雄  
印刷所——共同印刷株式会社  
製本所——共同印刷株式会社  
発行所——株式会社 旺文社  
〒162 東京都新宿区横寺町  
電話[編集] 03-3366-1111[販売] 03-3366-1111  
(販売・発送は取扱いあるが、本社は直営本舗「旺文社」)

©1986 SAKON SO  
ISBN4-01-071354-2 Printed in Japan  
(許可なしに複数、複数やねりなどを禁じます)

603113